

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2018/9/13～2018/10/13)

### <はじめに>

この報告書を読んで下さっている皆さん、こんにちは。現在、理学部化学科 3 年に所属し、2018年9月からドイツのライプツィヒ大学へ1年間の交換留学に来ている者です。この度、いろいろな縁があって僕の大好きな国、ドイツでの長期留学が実現しました。僕を既に知っている方、今ドイツ留学を考えている方、なんとなくドイツという国に興味がある方、いろいろいらっしゃるかと思いますが、今後こちらでの生活や勉学の様子、またドイツの魅力を少しでも発信していけるよう頑張りますので、どうぞお付き合いいただければ幸いです。

### <生活の状況>

こちらに来てちょうど1か月が経ち、Leipzigでの生活にもだいぶ慣れてきました。いま率直に言えるのは、大好きな国ここドイツでの暮らしが本当に楽しくなってきたということです。交友関係なども含めて。実は今、人生初の一人暮らし中なのですが、海外であっても、その土地の事情がわかってくれば案外どうにかなるものです。…と今は言えるものの、こちらに到着してすぐは、寮の契約・入居手続き、生活必需品の購入、住民登録、銀行口座開設など、生活を始めるにあたっての一連の手続きで大変でした。ただ僕の場合は、千葉大学に昨夏まで留学していたドイツ人の友達が Buddy としてそれらの場所を一緒に車でまわり、何から何まで付き添ってくれたので、非常にスムーズに事が進んだと思います。本当に助かりました。持つべきものは友です。Leipzigをはじめドイツ留学を考えている方は、ぜひ日本にいるうちからドイツ人の友達を作りましょう。初めから頼れる人がいるというのはありがたいことです。(ちなみに Leipzig 大学の場合は、日本学科の学生が日本人留学生一人一人に対して Buddy として付き、先ほどのような一連の手続き等を手伝ってくれるという制度があります。) さて、住んでいる住居はといいますと、大学近くにある学生寮の2人用シェアフラットの1室です。キッチンとシャワー・トイレは共用、部屋は各々にあるという感じです。僕の部屋は12㎡とやや小さいですが、一人で生活するには十分でしょう。キッチンは狭く、2人同時に料理することは不可能、難点はコンロが温まるまでに時間がかかることです。同居人はヨルダン人の学生ですが、もうここにはかれこれ3年ほど住んでいるらしく、キッチンにもいろいろなものが揃っているので、それらを使わせてもらっています。自分で買ったものといえば、スプーン・フォーク・皿・コップ・(スパゲティ水切り用の)ザルぐらいでしょうか。(大学の学生支援団体が無料の食器類貸出し Geschirrbörse を運営してくれているので、そこでも一部手に入ります。ただし先着順。) あと生活のことでいうと、やはり Leipzig は文化の街なので、街歩きをしているだけでも楽しいですね。歴史ある教会や建物にすぐ巡り会えます。また音楽でも有名な街ですから、道端の演奏家たちの音色がどこからともなく聞こえてくる…なんてことも。やはり音楽を愛し、音楽を絶やさない街

なんだなあって思いますね。その他にも、大学では留学生や新入生に向けて (Partyをはじめとする) 様々な催し物が開催されているので、それらにも足を運んでいます。こちらにいるドイツ人の友達と再会したり、新しくできた留学生の友達の誕生日会に行ったり、「Das Japanische Haus」と呼ばれる場所に入ったり (いずれ詳しく述べます)、一人でふらりと旅行に出かけたり…いろいろと楽しんでいます。

#### <勉学の状況>

こちらに来てから 3 週間 (9/17~10/5) は大学の留学生向け語学準備コース (Sprach- und Orientierungskurs) に参加していました。平日は基本、毎日 9:00 から 12:30 までドイツ語の授業で、午後は市内ツアーや大学図書館案内など、Leipzig という街と大学を知るための様々なアクティビティが企画されていました。今学期からやって来る留学生たちにとってこの準備コースへの参加は任意 (有料) なのですが、これ、絶対に参加しておいた方がいいです。というのも、学期開始前、大学生生活に慣れる時間的余裕が持てるというのはもちろんのこと、何より僕はこのコースを通じて「実際にドイツ語を話す」ことに慣れることができたから。ドイツ語を話す練習は日本でも Tandem 等を通じてやっていましたが、やはり speaking には自信がなく、こちらに着いてすぐの頃は生活の中でちょっと英語に頼ることもしばしば…しかし、いざ授業が始まってみると、当然ながら他の留学生たちも皆、自分と同じようにドイツ語を外国語として勉強していて、先生たちも優しく、クラスの中には自然と「間違えてもいいから自由にドイツ語で発言しよう」という雰囲気がありました。その流れに乗せられ、僕もつたないながらドイツ語を口に出す機会を増やしていき、今では日常生活の中でも積極的にドイツ語を使っています。というか、基本的にはドイツ語だけでどうにかしています。ドイツなら英語でも伝わるのでは? と思ったあなた。たしかにそうです、少なくとも大学周辺では。英語の方が正確に自分の言いたいことも言えるでしょう。でも最近気づいたのは、(特に街中の日常生活で) 下手でもいいから、どうにか頑張ってドイツ語で話そうとした方が、相手もわかろうとしてくれるし、より親切にしてくれるし、何より自分が「ドイツという Gemeinschaft の一員として暮らしている」実感を得られるということです。Leipzig に着いて間もない頃感じた「外国人」というレッテル、あるいは「外国人」としての孤独感は、もしかすると、こういうところに起因していたのかもしれない。言語と社会は、切っても切り離せないのです。僕が今、積極的にドイツ語を使いたいと思うのはきっと、語学の練習のためだけでなく、こうした理由もあるからなのでしょう。…さて、話を少し戻すと、この語学準備コースには世界各国から本当にたくさんの留学生が参加していました。主にヨーロッパの国が多いですが、出身地を聞くと中には (恥ずかしながら) 正確な location がわからない国も…でもだからこそ面白いのです。本当の意味での international とはこういうものかと、感銘を受けました。千葉大学でも様々な国から来た留学生と知り合いましたが、やはり出身国は限られています。想像以上に、世界は広いのですね。もう一つ新鮮なのは、クラスメートをはじめ他の留学生と、英語ではなくドイツ語で

交流することが多いということ。英語とはまた別の「お互いにとっての外国語」で話をするのは、なんとなく新鮮で面白いです。そうすることによって、ドイツ語がまた、より身近な言語にもなります。英語が世界の共通語と言われて久しいですが、世界にはこういうコミュニティだってあるのですね。留学生同士で話すときは当然、相手がネイティブではないので、気軽に話せて良い練習になります。ふと、千葉大学で日本語を勉強している留学生たちの気持ちがよくわかる気がしました。ちなみにこの語学準備コースでは、最初のクラス分け **Einstufungstest** の結果、僕は **B2** レベルのクラスに配属され、授業は内容的にやや難しい部分もあったのですが、最終的には **1,3** という好成绩でコースを終えることができました。え、たったの **1.3** しか取れなかったって？大丈夫、ドイツでは **1,0** が一番良い成績で **4,0** は落第です。専門の授業をはじめ、新学期の授業は **10月15日** から始まります。案外スロースタートなもので、気持ち的にはちょっと余裕が持てますね。

### <ドイツ写真館>

写真撮影が趣味なので、旅先や街中で撮った写真をいくつかご紹介します。やっぱり実際に写真で見ると、伝わってくるものも違うのではないのでしょうか？



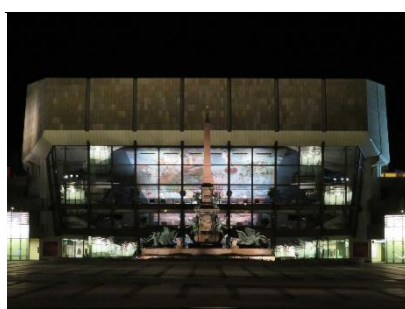
Leipzig 大学の正面と  
Augustusplatz



Dresden のシンボル  
Frauenkirche



本場 München の  
Oktoberfest



かの有名な Leipzig の  
Gewandhaus Orchester



1989/10/9 の月曜デモを  
想起する Lichtfest



ドイツ統一記念日の  
Brandenburger Tor 前

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2018/10/14～2018/11/21)

### <生活の状況>

さて、こちらに来て 2 か月ほどが経ちましたが、この 1 か月は大学でも新学期が始まり、本格的なドイツでの「日常」がスタートした月でした（授業等のことについては次項で書きます）。おかげさまでも Leipzig での生活には慣れましたが、生活自体に慣れたといってもドイツにおける **bureaucratic** な手続きはそう簡単に終わってくれないわけで、それこそ銀行の閉鎖口座（ビザ申請に必要な特殊な口座です）がうまく機能していなかったり、大学からの奨学金支払いが滞っていたり、それゆえ家賃の引き落としができていなかったり…そんなこんなであちこち駆け回るはめになりましたが、ふと思えば 2 か月前の何をするにも **Buddy** の付き添いが必要だった頃に比べ、今は身につけたドイツ語を活かし、自分一人でも臆することなく、そうした場所へ出向いて話ができるようになっていきます。多少なりとも成長でしょうか！ただ毎度困るのは、ドイツでよくある「担当者によって言うことが違う」という現象。つまり、あの人はこう言っていたのに、次行って別の人に聞くとまた違うことを言われる、なんてケースがざらにあるわけです。こっちにしてみれば迷惑な話ですが、裏を返せばそれは「担当者の裁量に任せている部分が多い」から。いつも基本となるルールやマニュアルに従って仕事をする人が多い日本と違い、ドイツではあくまでも最低限の規定がある中で、個々の事例は最終的に個人の判断で処理するという場合が多いように思います。でもそれってつまり、「交渉」が効くってことなのです。ダメかなと思われることでも、ちょっと持ちかけてみたら話によってはいいよってなるかもしれない。だからこそ、ドイツの人々は日々交渉し、議論するのではないのでしょうか。ドイツが「交渉の国」（なんて勝手に名付けましたが）と呼ばれる所以は、こうした事実起因のものなのかもしれません。話はそれでしたが、この 1 か月はより多くの人たちと知り合い、交流の輪を広げられた月でもありました。特に「日本」をキーワードとして。まずは Leipzig 大学の日本学科の学生たち。こちらには通称 JAAL (Japan Alumni Association Leipzig) と呼ばれる学生ボランティア団体があって、我々のような日本人留学生と日本語を学ぶドイツ人学生の交流を目的とした様々なイベントを企画してくれています。これまでには、新学期の歓迎として Semester-Auftaktparty や Tandem パートナーを見つけるため Tandem Speed-Matching などが行われました。やはりそれぞれお互いの国や言語に興味がある仲なので、親しくなりやすいですね。もう一つの「日本」をきっかけとした交流は、その名の通り、こちらにいる日本人との交流。僕と同じような交換留学生、Leipzig 大学で正規生として学んでいる人、1 年間のワーキングホリデーに来ている人、こちらに長いこと住んでいる人…立場は人それぞれですが、皆いろいろな思いや目標を持ってこの Leipzig という地に暮らしており、そうした人々の話を聞くのはいつも面白く、自身の今後について考えるきっかけにもなります。よく留学に行く際、現地で日本人ばかりと関わるなどと言われますが、たしかにそうでしょう、

いつどこへ行くにも日本人と一緒になんじゃもったいないというものですが、先述のように日本人同士で語り合うからこそ、お互いに得られる刺激、そこから生まれる考えというものもあるはずなのです。Leipzig にはそうした日本人が集まるコミュニティとして「日本の家 Das Japanische Haus」と呼ばれる場所があり、僕もよく足を運んでいるのですが、そこには日本人だけでなく、地域に住む人たちもたくさん集まります。だから僕にとって「日本」をきっかけに始まった交流の輪はローカルな人たちとの交流にまで広がっているわけで、そういう意味でも留学中は、日本人／ドイツ人／外国人とあまり細かいこと言わずに、より多くの面白い人たちと関わっていったらなと思う今日この頃です。(ちなみに「日本の家 Das Japanische Haus」のホームページはこちら：<http://djh-leipzig.de/ja/> 興味のある方はぜひ一度ご覧ください。)

#### < 勉学の状況 >

語学準備コース終了後、1 週間の猶予期間(?)を経て、10 月 15 日から授業がスタートしました。現在履修しているのは、ドイツ語の語学の授業 3 つ、専門の化学の授業 2 つ、他学部  
の授業 2 つです。以下、それぞれの科目名を挙げ、具体的に説明していきたいと思います。

- ・ Sprachpraxis Phonetik Aufbaukurs ドイツ語の発音の授業 (レベル : B)
- ・ Sprachpraxis Schreiben Aufbaukurs 2 ドイツ語のライティングの授業 (レベル : B2)
- ・ Sprachpraxis Konversation Aufbaukurs B2 ドイツ語の会話の授業 (レベル : B2)

ヨーロッパにおける語学能力基準は下から順に A1, A2, B1, B2, C1, C2 と呼ばれており、僕の場合は語学準備コースで B2 レベルのクラスに所属していたため、今学期は B2 レベルのコースのみ受講できるという形です。ちなみにこれらの授業は全て **Studienbegleitende Kurse** といって、Leipzig 大学の留学生なら誰でも無料で受けられるものなのですが、受講可能者数が限られているため、オンラインでの申込み時には受付開始と同時にパソコンに向かわないと取りたい授業が取れないかもしれません (つまり先着順)。授業は少人数制で全てドイツ語により行われ、それぞれ週 1 回 90 分、場所は大学のメインキャンパスからは少し離れた **Studienkolleg Sachen** という学校です。やはり週 3 回の授業だけでは語学準備コース参加中に比べ明らかにドイツ語を使う機会が減ってしまったので、JAAL のイベントを通して **Tandem** パートナーを見つけ、週 2 回ぐらいの頻度で **Tandem** もやっています。

- ・ Surface Analysis of Solid State Surfaces
- ・ Recent Trend in Chemistry

こちらは化学科ならぬ「化学部」での授業です。Leipzig 大学には「理学部」というものが存在せず、**Fakultät für Chemie und Mineralogie** といって化学と鉱物学だけで 1 つの学部が構成されています。他は数学と情報学で 1 つ、物理学と地球科学で 1 つという具合に。上の科目名を英語で書いたのは、これら両方とも英語による授業だからです。Leipzig 大学の学部の授業は大半がドイツ語なので、僕もこちらに来る前は化学もドイツ語で学ぶ覚悟をしていたのですが、実は化学部には、授業が全て英語で行われる **International Master**

プログラムというのがあって、10月初めに学部のコーディネーターの方と話をしたところ、もし英語による授業の方が望ましいというのであれば、(学部生だけ) そちらの修士向け授業に出てみることを勧めると言われました。たしかにドイツの学部課程は3年間なので、今、日本の大学で3年生にあたる僕は修士課程の授業に出ても内容的には問題ないだろうと判断されたわけです。実際ドイツ人の先生の話す英語はわかりやすいですし、ネイティブのように速くて難しいということもないので、授業はほぼ毎回100%ついていくことができます。(ドイツ語による授業にも一度出てみたことがあります、残念ながら黒板上の数式を除き、先生の言っていることはほとんど聞き取れませんでした…)

・ Grundzüge der Lexikologie der deutschen Gegenwartssprache 現代ドイツ語の語彙論

・ Das Fach Deutsch als Fremd- und Zweitsprache: Selbstverständnis, Gegenstände und Methoden 外国語/第2言語としてのドイツ語論

これらの授業は Philologische Fakultät (文献学部?) に所属する Herder-Institut という DaF/DaZ (Deutsch als Fremd- und Zweitsprache : 外国語/第2言語としてのドイツ語) を専門に扱う学科で開講されているものです。自分も外国語、特にドイツ語は本当に好きで勉強していて、授業も一度出てみたところ面白かったので、学期の途中から受講することを決めました。え? そんなこと突然できるのって? ドイツの大学の授業履修制度はおおよそ次のようになっています。まず、基本的に授業の単位 (Credit) は Modul と呼ばれるものを履修することによって付与されます。その Modul というのは、一つの授業テーマに対し講義、ゼミ、演習、実験などから構成されるもので、学生はその各々を受講し、最後に Modul 全体の試験を受けて合格すれば、その Modul の単位が得られるという仕組みです。で、上に挙げた2つの授業はどちらも別々の Modul の「講義」にあたるもので、すなわちそれぞれ Modul の一部になっています。そして Leipzig 大学では主に人文科学系の学部において、交換留学生に対し Modul の一部のみを受講し、単位を付与することを認めています。(通常の学生は Modul を部分的に受講したって単位はもらえません。) そのように Modul の一部だけを受ける際、学期初めに Modul 全体としての履修登録は必要ないので、結果、学期の途中からでも受講しようと思えばできるわけです。というわけで、留学生に対してはだいぶ寛容的な履修制度が敷かれていると言えるでしょう。なぜここまで長々と履修システムについて書いたかって? それは僕が渡航前、海外留学支援室で過去の月間報告書を読みあさっていた時に、誰かがここまで詳しく書いてくれたら、あれほどドイツの大学システムを理解するのに苦労しなかったらと思うからです。これを読んでいるドイツ留学希望者の皆さん、どうぞ参考にしてください。で、ちなみに上記の授業はもちろんドイツ語による専門の授業ですが、Herder-Institut には外国人の学生も多く、先生がゆっくり目に話してくれている(?)せいか、出てくる用語が語学の授業でも耳にする単語と同じせいか、案外、聞いているだけでも理解できる部分が多いです。(今号では授業を受け始める段階での経験をいろいろ語ってしまったので、具体的な授業内容は次号以降に書いていこうと思います。)

<ドイツ写真館>

今月のドイツ写真館は(紙面の関係上)1ページに拡大!ところでLeipzig 大学にはWILMA という学生団体があって、主として留学生向けにほぼ毎週末、団体で行く小旅行を企画してくれているのですが、それが結構割安でいろんなところに行けていいのです!その行き先も毎回、帰る時にはいいところだったなあと思わせてくれるところばかり。さすがわかっていますね、WILMA!今回はそんな小旅行で訪れた場所もいくつかご紹介します。



Harz にある世界一長い  
Fußgänger-Hängebrücke



Halloween 当日の  
Zoo Leipzig



陶磁器で有名な  
Elbe 河畔の町 Meißen

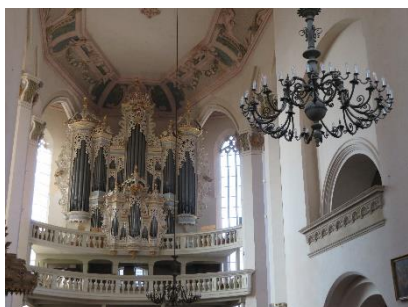


Potsdam のロココ式宮殿  
Schloss Sanssouci



ドイツの国会議事堂  
Deutscher Bundestag

ずっと見てみたかった  
Kurort Rathen の景色



Naumburg の町教会  
St. Wenzel のオルガン

Leipzig 郊外にある  
Cospudener See の夕日



## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2018/11/22 ~ 2018/12/31)

### <生活の状況>

さて、月間報告書第3号は大変執筆が遅れてしまいました。と、その理由は上の報告期間を見れば明らかなのですが、11月の下旬から始まって12月の終わりに至るまで、ドイツ各地および近隣諸国のクリスマスマーケットを巡る旅に出ておりました！え、お前授業はどうしたって？いやいや連続的ではなく、断続的という話です。毎週末を利用して、自分でもよくこのスケジュールをこなしたと思うぐらい、各地を飛び回っていました。(実際には全てバス等による長時間の陸路移動。) すみません、留学前からこの月だけはこう過ごしたいと決めていたのです。ですから今月の<生活の状況>は<旅行の状況>とならざるを得ないのですが、皆さんどうかお付き合いいただければと思います。報告書の中程には各地で撮った美しいクリスマスの写真たちも織り交ぜてありますので、どうぞお楽しみに。

So.	Mo.	Di.	Mi.	Do.	Fr.	Sa.
11/18	19	20	21	22	23 Wien	24
25	26	27 Leipziger	28	29	30 Düsseldorf	12/1 Aachen
2 Köln	3	4	5 Halle	6	7 Seiffen	8 Dresden
9	10	11	12	13	14 Praha	15
16	17	18	19	20	21 Nürnberg	22
23 Rzeszów	24	25	26	27 Kraków	28 Berlin	29

こちらがおおよそ6週間にわたる旅の全日程をカレンダー上に可視化したものです。都市名はあえて各々の国の言語で書きました。皆さんどこかわかりますか？星印を付け、橙色の線で表したのはライプツィヒでクリスマスマーケットが開催されていた期間。そう、ドイツのクリスマスマーケットって、クリスマス当日のおよそ1か月前から始まって、イヴまでにはだいたい終わってしまうのです。なぜなら、クリスマスは(ドイツでは12月25日と26日が祝日)あくまでも外出せず、伝統的に家族と実家で静かに過ごす日だから。日本でいうなら正月がそれに当たるでしょう。僕も縁あって今年は初めて、ヨーロッパの伝統的な家庭のクリスマスを体験させてもらうことができました。その貴重な経験についてもまた後ほど書きます。(僕が実際にどこでクリスマスを過ごしたかは上のカレンダーがヒント。)

さて、ここからは簡単にはありませんが、クリスマスマーケットを巡る旅の足跡をたどってみましょう。ドイツ国内外にわたる様々なマーケットを訪ね歩いていると、おのずとそこにその街や国の持つ文化・歴史の違いが表れていることに気がつきます。それでは los geht's!



<ライプツィヒ（開催期間：11/27～12/23）>

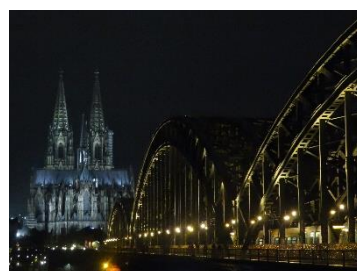
順番は前後しますが、まずは僕の住む街ライプツィヒを例にクリスマスマーケットとは何かご紹介しましょう。ドイツのいたる街、いたる広場では11月の終わり、冬に向けた寒さも厳しくなる頃、その名も“クリスマス市”が立ち始めます。連なる屋台の店先で人々が買い求めるのは、この時期にちなんだ温かい食べ物や飲み物、クリスマスには欠かせない可愛らしい飾りや贈り物。中でも人気 No.1 の定番は **Glühwein**（グリューワイン）でしょう。基本は赤ワインにスパイスを入れ温めたもので、人々はこのワインの入ったマグカップを片手に昼夜問わず語り合い、街中のクリスマスマーケットはいつも人で賑わいます。上段の写真は観覧車の上から！



<第1週 オーストリア・ウィーン（11/23～11/24）>  
時系列的にはこちらが先、今冬初めてクリスマスマーケットを目にしたのはオーストリア・ウィーンの地でした。今でもあの街を歩いた時の感動は忘れません。歴史的建造物が多く残る旧市街を中心に、街全体が光り輝くイルミネーションで彩られ、そのフィナーレを飾るともいべきウィーン市庁舎前のマーケット（写真上段）は、もう息をのむほどの美しさ！この後も各地の様々なクリスマスマーケットを訪れましたが、ウィーンのもが一番だったといっても過言でないぐらい。ちなみにここオーストリアでは、店先で **Glühwein** よりも **Punsch** の字をよく見かけた気がします。これにもいろいろ種類はあるのですが、こちらは主に果実酒がベースです。

<第2週 デュッセルドルフ／アーヘン／ケルン（11/30～12/3）>

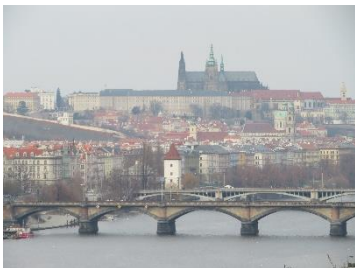
これは自分にとって初の（本格的な）西ドイツへの旅であったとともに、大切な友達を再訪できた心温まる旅でした。クリスマスマーケットの定番にはもう一つ、**Lebkuchen**（レープクーヘン）というスパイス入りの焼菓子があるのですが、アーヘンでは特別、それに似た **Printen** というお菓子が有名。会場入口で出迎えてくれたのも大きな **Printen** 人形たち！



<第3週 ザイフェン／ドレスデン (12/7～12/8) >

西に行ったかと思えば今度は東。ザイフェン—そこはまるで物語に出てくるかのようなクリスマス村でした。この村では住人の大半が木工細工に従事しており、右の Schwibbogen と呼ばれる置物をはじめ、ドイツ各地でクリスマスに飾られる伝統工芸品の多くはここで一つ一つ、手作りされています。

(ちなみに帰り際そんな田舎町で終電を逃し、人生初の野宿をするハメになったことは内緒。)そして僕の愛する街ドレスデンへは、念願の Dresdner Stollenfest (シュトレン祭り) を見に!ここ、ドイツのクリスマスケーキ Stollen の発祥地では年に一度、巨大 Stollen がパレードとともに街中を巡り、最後にはマーケットで切り分けられお客に…(書ききれない)



<第4週 チェコ・プラハ (12/14～12/16) >

とうとうやって来ました。“百塔の街”とも称され、数多くの多彩な歴史的建築が残る中欧の街・プラハへと初めて誘<sup>いざな</sup>ってくれたのは、WILMA 企画の2泊3日旅行。(ちなみに WILMA が何かわからない人は先月号要復習。)ドイツのきらびやかなマーケットとは打って変わり、プラハのマーケットは全体的にシックな感じで、これまた良い雰囲気です。当然チェコ語圏なので屋台先のメニューは見てもイマイチよくわからないのですが、明らかに食べ物の品揃えはドイツと違って東欧風で、おすすめは Trdelník (トゥルデルニーク) という紐状のパンを筒型に巻いて砂糖をまぶしたお菓子。ちなみにチェコの通貨は<sup>コルナ</sup>Kč、ドイツより物価が安いのも大変嬉しいところ。

<第5週 ニュルンベルク (12/21～12/22)、そしてポーランドへ>

ニュルンベルク、それは Christkind の舞い降りる街。子どもの姿をしたイエス・キリストの登場とともに幕を開ける、世界でも有名な(そして日本人観光客にも人気な)クリスマスマーケットです。噂通りその規模は大変大きく、いろいろな種類のマーケットが開催されていて訪れる人を飽きさせませんが、おかげで人混みには飽き飽きするハメになります(汗)。



<クリスマス ポーランド・ジェシェフ (12/23~12/26) >

さて、1つ前の表題を読んでお分かりの通り、クリスマス当日はというと、なんとドイツではなくポーランドにおりました！というのも、こちらで知り合った心優しい友達が(クリスマスに日本に帰るわけでもなく特に他に行く当てもないなら)ぜひうちの家族のところへおいでと招待してくれたからなのです。そうして、ニュルンベルクから直で BlablaCar と呼ばれる相乗り自動車に揺られること約 10 時間、向かった先はポーランドの東にあるジェシェフという街でした。なんとその友達のご家族は、街からやや離れた山中に貸ペンションを含む別荘地をお持ちで、その家にて家族親戚一同集まり、クリスマスを祝うとのこと。さすがにちょっと予想外でしたね(汗)。23日の夜にその家へ到着した僕は、友達のご両親に温かく迎えられ(敷地内にはまるでパン工房のような建物もあり、お父さんとの初対面はそこで彼が生地から自家製パンを作って焼いているところでした!)、翌日 24 日は朝からクリスマスの食事を準備するためお母さんの料理を手伝い(なんとといっても計 12 種の伝統料理を作って 24~26 日にかけて食べるそう、この準備の時期が一番忙しい!)、それからリビングに置かれた大きな本物のモミの木をクリスマスツリーを飾り付け(ゆうに僕の背丈を超える大きさ!)、そしてなんと午後は昨夜雪が降り積もったので外に出て一面雪の中を散歩しました。まさにホワイト・クリスマスとはこのことです! 人生初、感動しましたね。

(先ほどから Ausrufezeichen=感嘆符をやたら多用していますが、少しでもこの初日から始まる感動の連続が伝わりますでしょうか??) …とこの調子で書いていると紙面が何枚あっても足りないので簡潔に続けますと、24日の夜に伯母家族が到着したところでクリスマス最初の夕食をいただき(みな正装で、またポーランドはカトリックが主ですので食事前には聖書の言葉を、そして家族一人一人に対しては願いの言葉(というか Wunsch)をかけ合っていました、ちなみに料理はいくら食べてもまだありますよと出てくる感じで、日本でも名の知られているピロシキはなんとその料理の1つ)、そして夜 10 時から家族に連れられ近くの教会のミサへ行きました。翌日 25 日の午後には兄とそのパートナー含め全員が家に集い、再び一同で夕食を(実は 24 日は肉料理なしと決まっているようで、この日から解禁されました)。その後は皆がお互いのために用意して、クリスマスツリーの下にそっと置いていたプレゼントを開ける時間。僕は皆にそれぞれプレゼントを手渡す役に抜擢されたのですが、その中に自分の名前が書かれたプレゼントを見つけたときの嬉しさ、有難さと言ったら! 本当に友達とご家族親戚には感謝の言葉しかありません。間違いなく、これまでの人生で最も貴重なクリスマスとなりました。続く日も、一層降り積もった雪の中でそりに乗ったり、石ころを目に、エンジンを鼻に、鍋を帽子に雪だるま(注: 3 段重ね)を作ったり(人生初)、軟らかい雪の上でスノーエンジェルをやったり(人生初)、人が 2 人入れる程のかまくらを作ったり(人生初)、…自然の中で、童心に返って遊んだ気がします。そして体が冷えてくると家の中に入り、皆で温かいお茶を淹れて、暖炉の周りのソファに腰かける…この家で過ごした数日間、僕は本当に“家族の温かさ”というものを感じました。そして僕は暖炉脇の安楽椅子に揺られつつ、ふとこんなことを思ったのです。ああ、ヨーロッパの

クリスマスの秘密は“これ”だったんだと。ヨーロッパのクリスマスを特別で大切なもの  
にしているのは“これ”だったんだと。この1か月、数多くの光り輝く美しいクリスマス  
マーケットを見てきましたが、そこでは決して見つけることのできなかつたもの。それは、  
クリスマスの日の人々の心の中にありました。僕はその一番大切ともいべきものを、この  
長き旅の終わり間際になって、ようやくここポーランドの家族のもとで学んだような気が  
しました。



#### <第6週 ポーランド・クラクフ/ドイツ・ベルリン (12/27~12/28) >

“旅の終わり間際”ということは、まだクリスマスマーケットを巡る旅は終わっていません。  
お世話になったジェシェフをあとにした後、訪れたのはポーランド南部の街クラクフ。これ  
は完全に偶然だったのですが、旧市街の中央広場へ行くと（クリスマスはもう過ぎたとい  
うのに）まだマーケットが開かれていました！（こういうことあります。ベルリンやプラハも  
そのいい例。）会場の雰囲気はやはり東欧らしく、（プラハでもそうでしたが）青や白を基調  
としたイルミネーションが多かったように思います。美しい街で気に入りました。そして旅  
の最終目的地として訪れたのが、ベルリン。ここの一番有名なクリスマスマーケットはその  
名も“**Weihnachtszauber**”「クリスマスの魔法」。そう、クリスマスマーケットとは、寒い  
冬でも人々の心に魔法をかけ、温かい光を灯してくれるものなのです。そしてその光は、明  
かりに満ちた美しき冬の光景とともに、いつまでも心の中に残ります。さああなたも一度、  
その魔法にかけられにドイツのクリスマスマーケットへ行ってみませんか！



#### <勉学の状況>

さて、こちらもちょうと書きます。旅行の合間にすべての授業をきちんとなすのは、なか  
なか至難の業でしたが。今月号はもうここまででだいぶ間延びしている感もありますので、  
今回は履修している各授業の内容をそれぞれ簡潔に述べるにとどめたいと思います。

・ **Sprachpraxis Phonetik Aufbaukurs** ドイツ語の発音の授業（レベル：B）

ドイツ語の発音をより良くすべく、主にドイツ語特有の音、学習者が間違えやすい音などを一つ一つテーマとして取り上げ、丁寧に発音のコツや理論、練習法を教えてください。先生がとても愉快な人で面白く、かつ内容も役に立つものなので、今一番好きな授業です。

・ **Sprachpraxis Schreiben Aufbaukurs 2** ドイツ語のライティングの授業（レベル：B2）

いろいろな種類の（特にアカデミックな）テキストを書く練習をしています。必要に応じて文法事項を復習したり、効果的な表現・言い回しを学んだりもします。先生はちょっと自信がないところもあるのか、しばしば生徒からの質問に対して回答に困ることがあります。

・ **Sprachpraxis Konversation Aufbaukurs B2** ドイツ語の会話の授業（レベル：B2）

会話といえども B2 クラスでは日常会話などではなく、口頭で何か物事を説明したり、グループでディスカッションをしたりする練習をしています。そのため授業では様々なテーマを扱います。先生は物静かな人で、それゆえクラスもやや静まり返ることが度々あります。

・ **Surface Analysis of Solid State Surfaces**

大学院生向けの固体表面分析に関する講義。やはり日本で受けていた学部生の授業に比べると、より実際的で複雑な問題を扱っているように思います。その分内容は難しいところもありますが、先生は **International Master** コース全体の面倒も見、理解ある良き人です。

・ **Recent Trend in Chemistry**

こちらは毎学期中に数回行われる、外部からの招聘講師による講義に一定回数以上出席し、各回における試験に合格することで単位が付与されるという **Modul** なのですが、そもそも実施回数的に今学期だけでは単位取得は不可能と判明したので、履修を取りやめました。

・ **Grundzüge der Lexikologie der deutschen Gegenwartssprache** 現代ドイツ語の語彙論 DaF（外国語としてのドイツ語）を扱う学部の講義。単に語彙論だけでなく、「ドイツ語を教える」という教授法の観点からも、現代ドイツ語における語の成り立ちやカテゴリー、語の持つ意味概念などを考察しています。先生は気さくで、ユーモアのある人だと思います。

・ **Das Fach Deutsch als Fremd- und Zweitsprache: Selbstverständnis, Gegenstände und Methoden** 外国語／第2言語としてのドイツ語論

こちらはもっと総観的に DaF という分野について考える、イントロダクション的な講義。世界の中で、またより身近には学習者にとって、ドイツ語とはどのような言語であるのか、様々な観点からその「ドイツ語像」を浮かび上がらせていきます。先生は上記科目と同様。

<エピローグ>

クリスマス拡大号、どうもここまでお読みくださりありがとうございました。ヨーロッパのクリスマスは長いですね。11月の末にはもうクリスマスマーケットが始まり、12月過ぎて年が明けてもショッピングセンターにはクリスマスツリーが残っています。僕の部屋でももう11月の中頃から結局クリスマス過ぎた年末まで **All I want for Christmas ~** が流れていました。そういう気持ちにさせてくれるんです、ここドイツのクリスマスというのは…！

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/1/1 ~ 2019/1/31)

### <生活の状況>

さあ、早いものでドイツでも年が明けました。ドイツ語で「あけましておめでとう！」は“**Frohes Neues Jahr!**”といいます。実際には「おめでとう！」というより、「新しい良き1年を！」と人に新年の幸福を願う形であります、文法的には。さて、この報告書を執筆中の今はもう2月の頭なのですが、年が明けてからというもの、本当にあつという間に時間が過ぎていったように思います。それは何より、様々な友達と過ごした時間が大変充実していたからだと今振り返って思うのですが、まずは僕が今年初めて体験した、ドイツにおける“新年の迎え方”について少しお話ししましょう。というのもそれは、日本じゃ決してありえない、あの日本の静かな正月とは真逆をゆく、なんともワイルドで（ある意味）危険な**New Year**を目の当たりにしたからですーそう、そこいら中どこもかしこも花火騒ぎでした。花火と云ってあの夏の風物詩みたいな感じじゃ全然ありませんよ、路上だろうが広場だろうが建物の真横だろうが、個々人が自分で買った花火を好き勝手に投げるわ、打ち上げるわ。もう待ちきれない人もいるんでしょう、大晦日の数日前からどこかしこで花火の音が聞こえ、当日なんてもう朝からそんな調子。気が早すぎるんですけど（笑）。そしてクライマックスは大晦日の夜の**Augustusplatz**（アウグストゥス広場）。ここが一番すごいと友達に聞いて僕も足を運んだのですが、まあもう広場中が花火の光と煙と爆音でいっぱい！！たしかに年末のスーパーなどででもそうした**Silvester**（大晦日）用の花火は売られているのですが、たまに一体そんな花火どうやって個人の手で入手したのというぐらい、ものすごいやつを打ち上げる人もいます。（あとでドイツ人の友達に聞いたところ、そういう人たちは花火製造業関係に友人がいるんだよ、とのこと。）ドイツのこうした大変派手な“お正月”については前々から友人より話に聞いていましたが、正直、想像以上のものでしたね（汗）。でもこういう新年の迎え方も（日本とは大きく違うものの）あっていいと思います（というより実際は逆に、新年に全く花火を打ち上げない日本の静粛極まる正月が世界ではいかに珍しいか、各国の友達と話していて何度も実感しました）。というのもあのとき、光り輝く色とりどりの花火が飛び交う夜空を大勢の人とともに見上げていて、何より新年を迎えることに対する彼らの大きな喜びを率直に感じたのと同時に、その喜びを、嬉しさを自分の中で共有できたからです。その場にいた僕も素直に、明るい気持ちになりました。さあ今年もここドイツでより一層頑張っていこうと。さて、**New Year**の話はこのぐらいにし、その後1月はどう過ごしていたかという、友達との予定を中心に、大変楽しい（おかげで忙しくもある）毎日を送っていました。本当に、人付き合いはこんなに楽しいものかと改めて思うほど（日本にいた時よりずっと頻繁に）様々な友達との予定が立て続けに入っていたのです。その予定というのは、自分が誘う／誘われるどちらもあるわけですが、不思議なことに自分にとって、日本にいて日本語で日本人の友達を遊びに誘うより、今こっちにいて、いろんな

友達をドイツ語、英語あるいは日本語で誘う方が、ずっと気軽に感じるのです。これは単に今、海外で一人暮らしをしているからこそできるフットワークの軽さだといえ、そうかもしれない。ただ確実に言えるのは、こちらに来て4か月ほどが経ち、このライブツィヒの街に「土地」という意味でも「人」という意味でも、より深く馴れ親しんだ自分がいるということ。日々、同じ街に住む友達と楽しく遊べるというのは実際、そういうことなのではないでしょうか。今日は友達とお茶するのに、いつもと違うカフェに行ってみよう。友達が連れていってくれたレストラン、こんなおいしいところあったんだあ。友達の家でピザ作り、初めて行くところだからいつもは乗らないトラム1番で。こんな風に友達と遊んでいると、街中のお店にしても、通りの名前にしても、トラムやバスのルートにしても、いろんなことがより local にわかってきます。だから「人を知る」ということは、その「街を知る」ことにつながっているのです。逆に言えば、その「街」を知ろうと思ったら、そこに住む「人」を知ることが、一番の近道なのかもしれません。僕も気がつけば、大学構内や街中を歩いていて、友達や知り合いにふと出会う機会が多くなってきたように思います。ライブツィヒはそう大きくない街です。だからこそ人々はその中でともに生活し、遊び、助け合っています。そして僕も同じライブツィヒに住む一人として、そうした心優しき「人」に助けてもらった場面がたくさんあることを思うと、やはりこの「人」に「街」に、より一層強い思い入れを抱くのです。さて、本当は楽しかった1月の出来事を全てずらりと書き出したいぐらいなのですが、スペースもないので特に珍しいと思われるであろうもの3つだけ。1つ、今月よりかねてからやってみたいと思っていたアコーディオンのレッスンを音楽学校にて受け始めました！（全てドイツ語による説明や契約で、ここまでこぎ着けるのにまあ苦勞）、2つ、冬休み中 WILMA 企画の旅行で、チェコへ人生初のスキーをしに行きました！（運動音痴のわりには2日間のレッスンでそれなりに楽しめるまでに）、3つ、こちらで知り合った高校生のドイツ人の友達の厚意で、彼の学校 **Gymnasium** (ギムナジウム) を見学させてもらえました！（日本の高校ともいろいろ比較でき、大変貴重な体験）、4つ… **Fortsetzung folgt.**

#### < 勉学の状況 >

1月が忙しかったのには、もう一つ理由があります。それは、今学期に受講している3つのドイツ語の語学の授業において、それぞれ試験があったから。大学の授業期間自体は基本的に2月の第1週までですが、ライブツィヒ大学に附属という形になっている **Studienkolleg Sachsen** では、最後から2回目の授業時にだいたいテストが行われるので、要は1月中に試験ということになるわけです。その他、普通に大学の各学部で開講されている授業（他のドイツ人学生も受けている授業）については、たいてい授業最終回かその翌週に試験のみを行う形になるので、今月号ではひとまず、以下3つのドイツ語の授業の試験がどうだったか述べておきたいと思います。ちなみに報告書を書いている現時点ではもう成績もすべてわかっているので、その辺りも記載します。（以前9月号において成績基準の説明をした際、1,0が最良で、4,0は落第ですと書きましたが、正しくは「5」で落第でした。すみません。）

・ **Sprachpraxis Phonetik Aufbaukurs** ドイツ語の発音の授業 (レベル : B)

最後から 2 回目の授業時に筆記試験と口頭試験がありました。筆記試験の初めには発音やイントネーションを聞き分けるリスニング問題があり、残りは発音の法則などを説明する問題でした。一方の口頭試験は、各自、先生から渡された短めのテキストに目を通し(準備時間あり)、それを先生の前で発音に気をつけながら音読するというものでした。両者ともにそれほど難しくなく、発音についてはドイツ語に限らず外国語を勉強する際、いつも自分の中で意識的に取り組んでいる点だったので、授業全体を通して、また口頭試験においても、先生からお褒めの言葉を頂きました。で、最終的な成績は堂々の 1,0 です。よかった！

・ **Sprachpraxis Schreiben Aufbaukurs 2** ドイツ語のライティングの授業 (レベル : B2)

こちらはライティングですので筆記試験のみ。同じく最後から 2 回目の授業時に行われました。内容としては主に、これまでの授業で扱った文法、表現、その他知識を確認するための選択式、穴埋め、書き換え問題です。一部、文章を読んでそれに関する問いに答えるものもありました。上述の **Phonetik** の授業では宿題を課されたことは一度もなかったのですが、こちらではやや頻繁に **Zusammenfassung** (要約文) を書く、**Unterrichtsprotokoll** (授業記録) を書く、**Erörterung** (議論文) を書くといった (重めの) 宿題が出されていたので、それらの出来も加味して最終的な成績がつけられたようです。で、筆記試験の結果が思ったより良かったのと、上記宿題の文章が (時間を費やした結果) よく書けていたのもあってか、こちらの成績も結局 1,0 でした。ちょっと意外でしたが、嬉しいことには変わりはないです。

・ **Sprachpraxis Konversation Aufbaukurs B2** ドイツ語の会話の授業 (レベル : B2)

会話の授業においては最終週近くに試験が行われたわけではなく、学期の中ほどに 2 回、発表形式のテストがありました。1 度目は 2 人 1 組で、ある有名な絵画について紹介するというもの。2 度目はグループで、ある意見に対し賛成反対に分かれ、議論するというもの。いずれの発表も、あくまで授業時間内だけでほぼ準備し、では早速スタートという形だったので、試験勉強という意味ではあまり負担が大きくなかったですね。(ただし、ある程度のアドリブが求められる。) こちらもそのテストだけでなく、他の提出課題や授業中の態度も加味して成績がつけられましたが、最終的には 1,3 で **sehr gut** でした。良しとしましょう！

<ドイツ写真館>

今月のドイツ写真館も (紙面の関係上) 1 ページに拡大! …といっても今月は (先月の旅行ラッシュの反動もあり) 遠くへ旅行に出かけることはせず、ライブツィヒの中でおとなしく遊んでいたのも、それほどいろいろな写真はありません。とはいえ、ライブツィヒの魅力をもう少しお伝えしつつ、今まさに冬のドイツで生活していますよという視点で写真を選びました。もちろんドイツの冬は千葉に比べて寒いわけですが、こちらできちんとした厚手のコートを買ったおかげもあって何だかんだもう寒さには慣れましたし、ドイツの場合 (寮であっても) 屋内に入ればちゃんと暖かいです。そういえば去る 1 月 17 日、ようやく外国人局にてビザを受け取りました。これにてやっと合法的に滞在できる身分となりました (笑)。





Tram の停留所そばで上がった  
Silvester の花火

チェコとの国境に近いスキー場  
Oberwiesenthal



かの Goethe も通った  
Auerbachs Keller

Musikschule から  
借りている Akkordeon



Leipzig 旧市街のシンボル  
Altes Rathaus

ある雪の日の朝  
部屋の窓からの Aussicht



夜の Gewandhaus と  
背後にそびえる MDR ビル

Oper 前にて光り輝く  
Silvester の花火



## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/2/1 ~ 2019/3/4)

### <生活の状況>

さあ、2月も少し慌ただしく過ぎていったように思います(と振り返っているのは4月1日なのですが)。1年間の交換留学とはいえ実際には約11か月ですので、2月が終わるということは、留学期間のおよそ半分がもう過ぎてしまったことを意味します。時が経つのは本当に早いものです、**Die Zeit vergeht ja schnell**。そして僕にとっての半分が終わってしまったということは、僕より半年早く留学に来ていた日本人の友達、僕と同時期に来たが半年しかない各国の留学生の友達にとって、帰国の時期がやって来たことを意味します。そういうわけで今月は、友達との別れを惜しんだ月でもありました。せっかくこちらで知り合い、仲良くなっていろいろ話すようになり、来学期も一緒に頑張っていこうねと言いたいところですが、皆、またそれぞれの道に向かってドイツを離れていきました。それを「見送る者」、その後まだ「ドイツにいられる者」の気持ちは、一体どんなもののでしょうか。いっそう奮い立たされるのです。自分は与えられた残り半年で何ができるか、まだまだやれること・やりたいことはたくさんあるはずだと。そういう意味でこの1学期目の終わりは、一つの転換点と言えるでしょう。ある側面から言えばそれは「インプット」から「アウトプット」へのシフトかもしれません。およそ半年前、こちらに来たばかりでまだ何もかもが新しかった頃、日本にいたら絶対できなかつただろう体験、日本にいたら絶対会っていなかつただろう人々との交流を通して、多くのことを感じました。いわば、自分はずっと新しいものを「見せてもらっていた」のです。では、それを踏まえて自分はどう生きていきたいか、逆に今の自分が「見せられるもの」は何か、それを考えアウトプットしていくこと、自ら行動を起こしていくことこそが次のステップではないかと思ったのです(これを書いている今ももちろんそう思っています)。…というのを前書きとして(すでに長い)、2月の生活面の具体的なところを述べますと、前半は日々の予定(帰国前の友達と遊んだり、Dresdenで短期留学中の友達がLeipzigに来た折り案内したり、早稲田大学と日本学科Japanologieのワークショップに飛び入り参加したり、Chinese New Year Partyに招かれたり、いつも通りアコーディオン弾いたり、Tandemやったり…)をこなしつつ、後半、大学の試験も無事すべて終わって長期休業Semesterferienに入ってから、ハイデルベルク→マンハイム→ミラノ→ヴェネツィア→ピサ→フィレンツェ→ローマ→ナポリ(+アマルフィ)→ケルンと、ドイツ南西部から始まってほぼイタリアを縦断する2週間ほどの長旅に出ておりました。最後のナポリからケルン以外は基本的にすべて長距離バスによる移動ですよ。ハイデルベルクでは親しい友達と再会していろいろ語り合い、マンハイムでは出張中だった先生にお会いし、ミラノではイタリア人の友達と再会、街を案内してもらい、ヴェネツィアでは研究滞在中の日本の大学教授の方と偶然知り合って、ピサへの移動時には予約した列車を逃し絶望、フィレンツェでは一人旅の孤独さをそれとなく覚え始め、ローマ(正確にはヴァチカン市国)

では思わぬところで罰金徴収、ナポリではその雄大な海に少し心癒されつつ、アマルフィでは同じく一人旅中だった日本人の青年と知り合って、最後には（ここまで来ると意地だが）ケルンのカーニバルの **Rosenmontagszug**（バラの月曜パレード）を一目見るべく、初めてヨーロッパ内 LCC に乗ってドイツまでひとつ飛び。まあよくこなしたなと思います。正直イタリア滞在中後半は、もうドイツが恋しくなっていましたね。たしかにこれらイタリアの大都市には世界に名だたる有名な建築や美術があるのですが、まあどこに行っても観光客の多いこと多いこと。一体何本、日本人ツアー客の **Zug**（行列？）を見たかわかりません。まあどれも一見の価値があることは間違いないのですが、一気に全部見ようと一人で計画してまわるのは大変でした。それからさすが観光大国イタリア、美術館の入館料にしても何にしても容赦なく観光客からお金取っていきますね、学生としてはおかげで財布が厳しくなる一方です。また大都市の観光地周辺には必ずと言っていいほど観光客をターゲットとしたポッタくり商売の輩がうろついており、そうした点もせつかくの観光地の良さを下げていると言えます。…なんて書くとイタリアいいところないみたいに聞こえますが、そんなことはないですよ。やはりずっと行って見たかった水の都ヴェネツィアには感動しましたし、花の都フィレンツェも美しい街で気に入りました。それから何ととってもおいしいコーヒーが安く飲めるのは本当に嬉しいですね。イタリアに某アメリカンコーヒーチェーン店が進出していない理由は、おのずとお分かりいただけるでしょう。チェーン店と言えば、皆さんもよく行く某イタリアンレストラン店内に描かれたあのヴィーナス画も、本物はフィレンツェにあります。やはり本物を見ると、本物にしかない美しさがあることに気づかされます。だから皆さん、もし交換留学中や個人旅行でイタリアへ向かう機会があったら、ぜひ何でも「有名だから見に行こう」とするのではなく、少し視点を変え「本物はどんなものか」と期待を膨らませて足を運んでみてください。その期待は時に裏切られ、時に凌駕されますが、それが「本物を見る」ということです。そういう意味では写真も全てを伝えられるわけではありませんが、やっぱりきれいなので後の＜写真館＞に掲載します。どうぞご覧あれ。

#### < 勉学の状況 >

…と上記の報告書前半を書き上げてからすでにおよそ 1 か月が経過しており、もはや遡りまくって書いているこの 2 月号は一体何月号なんだという感じですが、留学生生活を段階的に追って記録するためにも、ちゃんと書きます。さて 2 月前半、イタリア旅行に出発する前、勉学面において大きな関門として立ちふさがったのは、何ととっても大学の専門の授業における期末試験でした。（先月号で述べた通り、ドイツ語の語学の授業の試験は全て 1 月中に終わっています。）“期末”試験とはいえ、ドイツの大学の場合、基本的に 1 つの **Modul** に対して試験は学期末に一度あるだけなのですが、**Modul** によっては筆記試験ではなく、授業内での発表 (**Vortrag**) を求める場合や、**Hausarbeit** と呼ばれる長文レポートの提出を求める場合もあるようです。これらは **Vorlesung**（講義）より **Seminar**（ゼミ）形式の授業によく見られますね。さてそのような中、僕が 2 月に受けたのは“**Surface Analysis of Solid**

State Surfaces”の筆記試験。この Modul は1つの Vorlesung からのみ構成されており、試験は大学の授業終了日（2月8日）の翌週に行われました。形式は当然のことながら記述式、英語開講の授業だったため、当日は英語で書かれた問題文と A4 の白紙数枚が配られ、90 分間ひたすらそれに英語で回答を書いていくという感じ。今思えばもっぱら英語で回答するような記述試験を受けたのは初めてでしたが、案外どうにかになりました。ただ2月前半、旅行の準備と試験勉強を同時並行でやっていたこともあり、勉強時間は正直言って十分には取れないまま試験に臨むこととなったのですが、それでも持てる時間を使ってどうにか授業スライドを一から復習し、先生がくれた Sample Questions も解いて、最終的に受けた試験の成績は 3,0 で befriedigend (=満足できる) でした。試験時間に余裕がなく完答できない問題もあった中、健闘した方ではあるかなと思います。さて、以前の号でも列挙した、他学部 Herder-Institut にて受講していた DaF (外国語としてのドイツ語) の授業についてですが、こちらは学期末に試験を受けるということはせず、最終回の授業時に先生から直接 **Teilnahmeschein** (参加証) を受け取り、「授業に出席していたこと」に対して単位を付与してもらいました。え、そんなことできるの？はい、これまた留学生だけに与えられた特権です。去る 10 月号でも説明した通り、ライプツィヒ大学の留学生は主に人文科学系の学部において Modul の一部のみを受講することが認められていて、そうした場合、各授業から **Teilnahmeschein** という形で部分的に単位をもらうことができます。 (例えば、ある Modul 全体 (1つの Vorlesung と1つの Seminar から成るとする) を履修した際の単位が 5 単位だとしたら、そのうち Vorlesung だけに出席した場合、2 単位分が **Teilnahmeschein** としてもらえる、など。) ただこの **Teilnahmeschein** 方式、少々いい加減？なところもありまして、つまりそれは (担当教授や受講者人数にもよるのでしょうか) 毎授業時、特に出席を取ったりすることもなく、単に最終回の授業終了時、**Teilnahmeschein** が欲しい人は私のところにもらいに来て～という感じになるわけです。先生、誰が授業にいて誰がいなかったか、実はちゃんと見ているのかもしれませんがね。(いや、少なくとも自分が取っていたその授業ではほぼ不可能。) ちなみにこの Modul 部分履修システムについてもう少し補足しておく、Modul の一部しか受講しない場合も、最終的に Modul 全体の試験を受けるかどうかは自分で選択することができ、受けない場合は先述の **Teilnahmeschein** (例えば 2 単位) をもらって終了、受ける場合は試験日に他の通常受講者と同様試験を受けて、きちんと合格ラインを上回れば追加で単位がもらえる (例えば 2+2=計 4 単位) ことになります。以上、このような形でこちらに来て 1 学期目の授業履修が無事終わりを迎えたのでした。

#### <イタリア写真館>

さあ、今月のドイツ写真館はこのように名付けざるを得ないでしょう、だってほぼ全部イタリア旅行中の写真ですから、最後の **Kölner Karneval** を除き。個人的に行ってよかったなと思うのは、ミラノで会ったポーランドの友達にたまたま勧められ立ち寄ることになった **Amalfi 海岸**。海が本当にきれいな静かで落ち着いた町で、ふっと心休まる思いがしました。



大聖堂の奥にそびえ立つ  
かの有名な Pisa の斜塔

仮面舞踏会の名で知られる  
Venezia のカーニバル



Milano の中心 Vittorio  
Emanuele II のガレリア

Roma の広大な遺跡群  
フォロ・ロマーノ



Firenze の空にかかる  
花の Duomo 大クーポラ

夕闇の迫る Napoli 湾  
サンタ・ルチア港の卵城



保養地 Amalfi 海岸の  
美しい海と断崖上の家々

Rosenmontag に沸く  
Köln 当日のパレード



## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/3/5～2019/3/31)

### <生活の状況>

さて3月もまだ Semesterferien、つまり長期休暇の期間です。3月5日の早朝、長きイタリア旅行からようやく Leipzig に帰ってきた僕は、やっとのんびり一息つくかと思いきや、その日の昼にはちょうど休暇で Leipzig を訪れていた日本のドイツ語の先生とお会いしてお茶し、夜にはちょうど Leipzig に遊びに来ていた日本の友達と会って飲みに行き…という感じで早速、忙しくも楽しい Leipzig での生活が戻ってきたのでした。ここで一つ、Leipzig ならではの3月のハイライトをお伝えしますと、この街では毎年3月の下旬頃、Leipziger Buchmesse と呼ばれる大規模な本の見本市が開催されるのです。その規模はドイツ最大級なのはもちろんのこと、ヨーロッパの中でもかなり有名。いわゆる千葉の幕張メッセみたいな施設が街の外れにありまして、そこにある5つの Halle (ホール) が全て使われ大々的に行われるのです。扱われる“本”のジャンルは児童書から専門書、さらには楽譜や聖書まで、本当にあらゆる分野がカバーされています。そして何より多くのドイツ人が楽しみに足を運ぶのが… (+日本人としても一度見ておくと面白いのが…) Manga-Comic-Con、つまり日本のアニメ・漫画コーナーです。“コーナー”なんて書きましたが、実際はそんな可愛いもんじゃありません。先ほどメッセにあるといった計5つの Halle のうち、丸々1つがこのためのスペースに充てられています。ある一国の文化の一部分 (つまりは日本の漫画アニメ文化) が、ヨーロッパ最大級の本の見本市においてその5分の1を独占するという事実は、考えてみれば恐ろしい話です。それだけ日本の漫画アニメ文化は世界中に浸透しているということですね。だから案外日本人としてヨーロッパで「日本出身です」と自己紹介すると、話題には困らなかつたりするんですよ。だって大抵「僕が好きな漫画はね…」 「私が幼い頃見てたアニメはね…」 と向こうから話を続けてきますから(笑)。不思議ですね、遠く離れた全く違う国で生まれ育ったはずなのに、子どもの頃に見ていたテレビの話をする、なぜか同じアニメに行きつく…でもそれは同時に、現代ヨーロッパにおいて「日本文化」と言うと、即座にそうした漫画やアニメと結び付けられる可能性が高いということです。もちろん日本人として、日本の文化が世界中で知られていることは大変嬉しい事実なのですが、同時に「それだけじゃないよ」と言いたくなる気持ちも僕の中にはどことなくある気がします。その国を実際に訪れずして、その文化を真に理解することは不可能と僕も自身の経験から わかっています、そのようなアニメ・漫画の文化はあくまでも“ある一側面”であって、

「日本文化」はもっと多面的ですよということをぜひ知ってもらいたいと思う今日この頃です。ちなみに Buchmesse 自体における体験は面白く、楽しい一日でありました。ドイツ人の友達が Manga-Comic-Con のブースでバイトしていたり、ある友達は自分のブースを出して自作のイラスト作品を販売していたり…さて、そんなイベントもあったので3月もどんどん時間が過ぎていきましたが、先月号ではこんなことも書きました：「…自分は与え

られた残り半年で何ができるか、まだまだやれること・やりたいことはたくさんあるはずだと。そういう意味でこの1学期目の終わりは、一つの転換点と言えるでしょう。」…というわけでこの長期休み中の3月は、留学1学期目を振り返って、後半2学期目をどう過ごすべきか、じっくりと考え、次なる指標を立てるためにも時間を使ったかったのです。そこで僕が考え出したアイデアが、その名も「南仏ニース・小バカンスの旅」(また旅行かい笑)。ただ今回の旅は一味違います、なんとなくただボーっと、ひたすら目の前に広がる雄大な海を見つめながら、考え事をしたかったのです、今後に対する、そして将来に対する。というのも当時、Leipzigではまだ相変わらずドイツらしい冬のどんよりとした天気が続いていましたし、ドイツで海を見ようと思ったら北の端っこまで行かないといけないし(そういう点では日本と違い、ドイツにおいて海を見るのは“珍しい”)、何より予め3月23日にケルン日本文化会館にて行われる日本語教師研修会(最近日本語教育にも興味を持ち始めたので。また一つ面白い経験となりました)に参加する予定があったので、このついでに研修会の後どこかへ行ってやろうと行き先を考えた際に思いついたのが、この時期多くのヨーロッパ人が、降り注ぐ燦爛の太陽を求めてバカンスに向かうという、南仏ニースの地でした。(今思えば、決してニースがケルンから近かったわけでは全然ない。)先月のイタリア縦断旅行では、各都市に2日ぐらいずつしか滞在できず、なにせそれぞれ見どころも多かったので、旅行中なかなか身が休まる思いもしなかったのですが、今回はただ「海を前に考え事をしに行こう」というテーマの下、旅立ったわけです(実際はニース近辺のモナコ公園やコート・ダジュール沿いの小村も訪ねたのですが)。でも本当にニースには、基本海しかありません、見るべきものとしては、でもそれでいいのです。それだけを求めて、多くの人々がこの地へバカンスにやって来るのです。さて、そんなニースで何を考えたかといえば(海の見渡せるいい場所を見つけては紙と鉛筆を取り出して腰を下ろし、その名も“ニース・ノート”と名付けて、その場で考えたことを書き記しました笑)、学部卒業後、何をしたいかということ。僕は9月号の初めにも記した通り理学部の学生で、「この度、いろいろな縁があって僕の大好きな国、ドイツでの長期留学が実現しました。」と書きました。詳しくは述べませんが、本当にふとしたきっかけで、お世話になっていたドイツ語の先生からLeipzig留学の話を頂いたのです。正直なところ、その話をもらったのは僕が留学に出発する約半年前

(同年3月末)のことで、恥ずかしながら当時、およそ“留学計画”と呼べる立派なものを持ち合わせていませんでしたが、それでも僕を「行かせてください」という返事へ導いたのは、上に書いた通り“ドイツ”という国に対する、純粹に湧いて止まぬ興味でした(きっと僕の先生もそれをわかっていたのでしょう)。以前にも、何度か旅行で一人ドイツに行ったことはありましたが、“ドイツ”という国に住むとは一体どんなものなのか、この目で見て、この体で体験してみたかったのです。単純な理由に聞こえるかもしれませんが、僕がドイツという国に惹かれ、確かめたかったことはそれであり、今回の話はきっと逃したら二度とはやって来ないチャンスだろうと思ったのです。…そうしてドイツでおおよそ半年を過ごした僕は、幸い多くの人との出会いや経験にも恵まれ、今、ここでの暮らしがとても気に入って

います（それはこれまでの報告書からも伺えたかもしれませんね）。何か面白いことが起きそう、何か面白いことが起こせそう、そういった可能性に満ちている気がするのです。ここには面白い人もいるし、すごいと尊敬できる人もいるし、いろんなことをやっている人たちがいる。そしてそういう多様な生き方を広く受け入れる、ドイツ社会の寛容性というものがある。そんな中で自分も一つ、面白い人生を歩んでみたい。じゃあ自分のやりたいことは何だろうか。かねてより僕は英語・ドイツ語をはじめ外国語を学ぶのが大変好きなのですが、何せ世の中に「語学」という専門分野はありませんので、語学は趣味、と割り切ってやっていたところがありました。しかしこちらに来て、ドイツの大学には通称 DaF (Deutsch als Fremdsprache) と呼ばれる「外国語としてのドイツ語」、つまりその外国語教育面における 応用言語学的研究に焦点を当てた分野・課程が存在することを知り（過去の報告書参照）、それは自分のこの「語学」や「外国語習得」に対する興味に答えてくれる専門分野なのではないかと考え始めました。それに加えて、やはり外国語を通じたコミュニケーションというのは楽しいもので、特に日本人としてドイツ語を学ぶ自分は Tandem や日本学科でのイベントを通して、日本に興味を持ち、日本語を学ぶ多くのドイツ人たちと関わってきましたが、そこから発展して、もし将来的に日独の交流に携わる仕事が出来たら、それも自分にとって 大きな喜びとなるだろうと思います。先述のニース・ノートの最後を読み返すと、こう記してあります：「…学部卒業後の進路はどうだろう。頭の中で 3 つほどに絞れた気がする。1.)ドイツの DaF 学部課程に正規で入学する 2.)日本で外国語教育論の大学院課程に入る 3.)日独協会などの機関に就職する」それぞれの実現性はまた別として、自分の興味に素直になるとこうだ！と一人思いを抱く僕を乗せた（座席間隔の狭い easyJet の）機体は、3月27日の夕方、南仏 Nizza の地を離れてドイツ Berlin へと飛び立ち、その夜、僕は再び Leipzig へと帰ってきたのでした。（同じ夜友達にパーティーへと誘われ、最終的に 1:00 までバーで飲んでいたという話は内緒…）

#### <勉学の状況>

前半、あまりにも個人的なことをいろいろ書いてしまったので、後半は（読者にも役立つ）もっと客観的なことを述べようと思います。前半に書いたくたはおよそ模範的ではないのですが、世の中にはそういう留学だってあるのだ、と長い目で見ていただければ幸いです。さて、<勉学の状況>といっても大学はまだ休み期間中で、授業は全くなかったわけですが、これを機会に先学期履修していた（そしてドイツ留学を考える日本人学生にとって重要であろう）ドイツ語の語学の授業に関して、総括を述べておきたいと思います。僕自身はこれまでの報告書でも述べた通り、発音・ライティング・会話に関して、それぞれ週 1 回 90 分の授業を計 3 つ履修していたわけですが、正直に言うと、授業の質・楽しさはかなり担当の先生によりけりです。例えば同じライティングをやるにしても、レベル (B1~C1)



は別として、どのクラスを選ぶか、いくつか曜日や時間帯には選択肢があります。その場合、他の授業との重なりの問題がなければ、ぜひ先生で選ぶことをお勧めしますね。当然、留学を開始する学期はまだ誰がどんな先生なのか見当もつかないでしょうから、例えば先学期から既にいる他の日本人や他国の留学生に、おすすめの先生を尋ねてみるといいでしょう。語学の授業も大学の講義等と同様、1学期間ずっと同じ先生とクラスメートで続くわけですから、モチベーションを維持し、高めるための環境選びは大切かと思います。ましてや1年の交換留学では2学期しかないのですから、基本的にチャンスは2回です。それから授業の頻度について言うと、上述の3分野の授業を含む**Studienbegleitende Kurse**は最大3つまでしか受講できないので、週1回のもものだけを選んだ場合、頑張っても1週間で90分×3=4.5時間です。かつ授業中、自分一人が90分間ドイツ語で話し続けるわけではないですから、話す練習をしようと思ったらやっぱり時間的に足りないわけで、そこは以前の報告書でも述べた通り**Tandem**で補うべきと言えるでしょう。ついでに内容に関してもコメントしておく、これら**Studienbegleitende Kurse**はその名の通り、留学生がドイツの大学で勉強するにあたって、そのお伴（手助け）となるよう設計されているコースですから、その内容も当然ながら大学の勉強において必要とされる力を身に着ける、より **wissenschaftlich**、アカデミックなものになります。例えば、現地の語学コースでもっと日常会話的なドイツ語を学びたいんだけど…という場合は、**Studienbegleitende Kurse**ではなく、先ほども登場した**Tandem**の中で教えてもらうのが一番です。このような形で、語学の授業と**Tandem**それぞれの利点を知り、両方をうまく組み合わせて活用すれば、より効果的なドイツ語学習につながるのではないのでしょうか！

#### <ドイツ写真館>

さて、今月のドイツ写真館は（あまりページの間取りを考えずに書き続けてしまったせい）中途半端なところから始まっているので、どれぐらい写真を載せようか迷っております…それはさておき、3月最後のハイライト（30日）は、ドイツ人の友達に誘われ **Leipzig** 郊外の湖 **Cospudener See** へ（別の友達の自転車を借り）一緒にサイクリングへ出掛けたこと！これこそドイツらしいと自分が思い続けていたことの一つ、実現できてよかった！誘ってくれた友達に感謝。このためだけでもドイツに来た甲斐があった…（言い過ぎか笑）なんて思わせてくれるほど、すがすがしい、素敵な週末のひとときでした。では、そろそろ写真を。



Buchmesse の会場と  
なった Messegelände

Köln 日本文化会館と  
その前の桜の木





Rhein 川の対岸から  
見下ろす Kölner Dom

丘の上の城跡から見渡す  
バカンス地 Nice の海



Monaco 最大規模を誇る  
Casino de Monte-Carlo

高級ホテルが立ち並ぶ  
リゾート地 Monaco



太陽の光が降りしきる  
昼間の Nice 海岸

夕暮れ時を迎える  
穏やかな Nice 海岸



Côte d'Azur 沿いの小村  
Villefranche-sur-Mer

Cospudener See を  
取り囲む自転車ロード



## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/4/1 ~ 2019/4/30)

### <生活の状況>

さて、4月になりようやく新学期、それこそ先の冬学期初めは **Einführungswoche** と称したいわゆる“猶予期間”が与えられていましたが（こちらの大学は秋始まりなので）、夏学期の初めにそうした措置はなく、4月1日（月）から早速、元気よく授業がスタートしました。今振り返れば4月は特に後半戦、自分でもよく体がもったなと思うくらい予定がいっぱいで（そんないっぱいにした張本人は自分）、先月のニュースでの一件もあり、新学期早々勢いづいていた僕は、まさかの4月入って2週目で体調を崩すというヘマをしたわけですが、それでもいろいろやることができた1か月でした。1つ目のハイライトとしては、**Leipzig** の **Japanologie** 日本学科に対する貢献です。実はまだ千葉にいた頃、ご縁あって千葉大学の留学生支援に携わる「けやき倶楽部・国際理解グループ」の皆様が企画・運営されている、浴衣着付け体験会に参加させてもらったことがあるのですが、その後、自身のドイツ留学が決まったことをご報告した際、僕に浴衣一式を貸して下さり、ぜひ **Leipzig** でも日本の文化を紹介するきっかけを、とそのご意志を託して下さいました。それを胸に **Leipzig** へと留学に来た僕は、いずれこちらでも同様の浴衣着付け体験を開催したいと思いつつ、1学期目はそれこそいろいろ慣れるのに時間が必要でしたので、今学期こそは！！と意気込んでいたわけです。そうして、こちらでけやき倶楽部さんとも長年交流を持つ **Japanologie** の先生の力も借りながら、基本的には企画段階から一人で準備を始めました。…が、まあ何ととっても一番大変だったのは、浴衣集め。僕が日本から持って来られたのは1着だけでしたから、“体験会”とするには、少なくとももう数着必要。駆け回りました。**Japanologie** で日本に留学した経験のある人たち、**Leipzig** 独日協会の人たち、さらにはその知り合いの人たち…そうして当日、どうにか総勢10着の浴衣を揃えることが出来ました。この“駆け回り”を通して、また新たな人たちとの出会いがあったのもいい思い出です。会としては、僕が作成したスライドをもとに30分ほどドイツ語で浴衣の歴史や現代における着こなされ方を紹介し、その後は皆で着付け体験、最後は日本人の友人がこの日のために作ってくれた特製どら焼きを囲んでお茶会という風に。結果的には約20名もの人たちが参加してくれ、何より会の後に、僕のドイツ語での発表は良かったよ、面白かったよと個人的に声を掛けてくれた友達が何人もいたのは嬉しい限りでした。身を削って準備した甲斐があったというものです。というような形で自身のイベントを創り上げていく傍ら、以前10月号でもお話しした **JAAL** (**Japan Alumni Association Leipzig**) の企画ミーティングにも日本人一人参加するようになっていたので、彼らが企画する **Semester-Auftaktparty** (新学期の歓迎パーティー) や **Weggeherseminar** (今秋から日本へ留学する学生のための情報交換会) の運営にも様々な形で携わりました。特に前者について、それこそ自分が **Leipzig** で留学を始めてすぐの頃に行われた前回の **Auftaktparty** では、まあドイツ来たての一参加者に過ぎなかったわけです。

が、それから半年経った今回のパーティーでは、司会進行の通訳を任されるまでに（笑）。我ながら、この半年間でいろいろ成長できたかなと思える瞬間でもありました。でもこれらは全て、先々月号でも書いた「いわば、自分はいつも新しいものを「見せてもらっていた」のです。（中略）逆に今の自分が「見せられるもの」は何か、それを考えアウトプットしていくこと、自ら行動を起こしていくことこそが次のステップではないかと思ったのです。」との考えに基づき、行動をした結果。特別なことではないかもしれませんが、例えば自分は一人の“日本人”としてここドイツで何が出来るのか、それを考え実践することが、1年間の留学をまた一つ上の段階へと持っていき、「受け取る」だけに終わらない留学生活を実現する一つの秘訣なのではないでしょうか。（といつつ、まだまだ僕も自分の発信が足りていないところもあります。）さて半年の期間といえば、4月30日に WILMA 主催の学生パーティーがあったのですが、その会場の一角にて友達と話しながら立っていた時のことです。他にも僕の各国の留学生の友達・知り合いが多く来ていたので、彼らが傍を通るたびに挨拶をし、軽く話を交わしていたら、一緒に立っていたドイツ人の友達が、ふと「お前は一体どれだけ顔が広がったんだ（笑）」と。考えてみれば皆、この半年間で知り合った人たち。この半年間で広がった交流の輪。僕の場合、ドイツ渡航前からこちらに何人か友人はいたので、全く0からのスタートというわけではありませんでしたが、それでも人間、全く新しい環境（それも外国）に放り入れられ半年で、ここまで自分の **Bekanntenkreis** を広げられるものなんだなということがわかりました。…というより実感できました。そうやって得られた様々な出会い、ぜひこれからも大切にしていきたいと思います。さて、前半最後はまた一つドイツ生活ネタとして、4月19日から22日にかけて祝われた **Ostern**、ドイツのイースターについて少しご紹介しましょう。この **Ostern** という行事は毎年、**Karfreitag**（聖金曜日）、**Karsamstag**（聖土曜日）、**Ostersonntag**（復活祭の日曜日）、そして **Ostermontag**（復活祭後の月曜日）の4日間から構成されており、その中心となる **Ostersonntag** の日付は“auf den Sonntag nach dem ersten Frühjahrsvollmond”、つまり春分の日の後の最初の満月の次の日曜日、と決められています。ややこしいですね、でもそれはドイツ人たちにとっても同様。だから毎年 **Ostern** の時期が近づくと、今年の **Ostern** はいつだいつだ！？となるわけです。というのも、我々学生にとってもその日付を知ることは大事だから…お気づきの通り、復活祭前後の金曜日と月曜日もドイツ全土で祝日となります。どうやらこの **Ostern**、例年は3月中に当たることも多いようで（そうなると3月まだ休暇中の大学生にとっては **Ostern** 祝日が実質無意味なものとなり笑）、今年はなおさら注目が集まっていたようです。ちなみに **Karfreitag** はイエス・キリストが磔刑に処された日にあたり、日曜日はその名の通り、イエスが復活したとされる日ですから、宗教上の意味では **Ostern** の方が **Weihnachten**（クリスマス）より重要な気もしますが、それでも **Weihnachten** はドイツ人が例外なく皆そろって実家に帰る一方、**Ostern** は別に帰らないこともあると答える人が一定数いたので、国民的祝日としてはやはりクリスマスの方が圧倒的に大事なようです。そもそも日本ではイースターを国民的に祝ったりはしてないですしね…さて、その **Ostern** 休暇

に家族ですることといえば、よく知られているように卵探し（子ども向けだそうです。でも僕も童心に返って卵探したかった…実際は浴衣イベントの準備に追われてそれどころではなかったのですが、**Ostereiersuche** をするという僕の夢はついえません笑）、手製の卵料理を作って食べるなどですが、僕の友達の中には **Osterwanderung** と称して、家族で“イースターハイキング”（？）なるものを楽しんだという人もいました。つまり、**Oster**-と語頭に付けて何かやれば、何でもいいのかもしれませんが（笑）。そういう僕もイースター当日は、ザクセン州 **Dresden** よりさらに東の **Bautzen** という古くから **Sorben**（ソルブ人＝ドイツ東部地域に住む西スラブ系少数民族）の文化が息づき、**Osterstadt** としても知られる街へ、有名な **Osterreiten**（イースター馬乗り？）のパレードを見に行きました、**WILMA** 遠足で。なんて書いていたら、いつまでたっても後半部に進みそうにないので、前半はこの辺で（汗）。

#### < 勉学の状況 >

新学期が始まったので、今月はまず、またどのような授業を履修することにしたのか、一覧でお届けしようと思います。基本的には先学期同様、ドイツ語の語学の授業＋大学での専門の授業という二本立て形式ですが、大きく変わった点としては、語学は週 1 回の授業中心から単純に週 3 回の **Sprachintensivkurs**（集中コース）に切り替えたこと、大学の授業は先月号でも述べた **DaF**（**Deutsch als Fremdsprache**：外国語としてのドイツ語）に対する興味から、主に **Herder-Institut** の授業を履修するようにしたこと。では、以下詳細。

- ・ **Sprachpraxis DaF für Fortgeschrittene C1** ドイツ語の集中コース（レベル：C1）
- ・ **Sprachpraxis Grammatik Aufbaukurs C1** ドイツ語の文法の授業（レベル：C1）

こちら二つが今学期 **Studienkolleg** で履修する授業です。レベルとしては先学期、無事 **B2** のクラスに合格したので、今学期からはいよいよ **C1** のコースが選べるようになりました。といっても本当は正確なことを言うと、この **Studienbegleitende Kurse** における「**B2** パスしたから **C1** 進んでいいよ」という方式は、同じカテゴリー内の授業でしか通用しません。つまり例えば先学期、会話 **B2** のクラスに合格したなら、今期は自動的に会話 **C1** のクラスを受講する権利を持ちますが、文法 **C1** クラスの履修にそのルールは適用されないのです。ではどうすればいいかというと、そのレベルアップ方式に関係なく直接、特定の授業を受講したい場合は、学期の初めに行われる **Einstufungstest**（実力測定テスト）を再び受験して（無料）、一定以上の点数を取ることが必要です。**Studienbegleitende Kurse** の各コースは **MPZ** と呼ばれる数字を持っていて、これを上回る点数を先ほどのテストで取れば、そのコースの受講は認められることとなります。もうお気づきかもしれませんが、僕は先学期、発音・ライティング・会話の授業を **B2** で履修したと書きました。ということは文法 **C1** のクラス（**MPZ**：85）を今学期から受講するには、先のテストを再受験する必要があったのです。正直なところ、半年経ってからの実力試しという意味でも、今一度受けたかったのですが、点数は無事、初回の（たしか）76点から89点に上がっていました。一方の集中コースは、毎週水曜から金曜の週3回、時間帯は13:30～16:45です（途中休憩あり）。

ただこちらの **Sprachintensivkurs** は 1 学期間で 300€ の有料コースとなります。それにもかかわらずこのコースを選択した理由（まるでケチのように聞こえますが実際そうです）、また先述の通り、2 学期目に入ってから文法の授業を取り始めた理由などは、次号以降にて詳しく説明していこうかと思えます。

#### ・ **Modernes Japanisch für Fortgeschrittene 2 – Übersetzen und Dolmetschen**

こちらはなんと **Leipzig** 大学の日本学科で開講されている「翻訳と通訳」の授業です。え、日本人学生なのに日本学科の授業取っていいの？ズルくない？いやいや、なにも日本語を一から学ぶわけではありませんから。ドイツ語から日本語への翻訳練習を目的とした授業です。つまり日本語を学ぶドイツ人学生と、我々ドイツ語を学ぶ日本人学生が一緒になって知恵を出し合いながら、独→日翻訳に取り組むという営みであります。もちろん翻訳の内容も、「私は昨日買い物へ出掛けた。」なんて易しい単文じゃないですよ（だからドイツ人側にとってはより大変なのです）。担当の先生はこちらで日本語を教える日本人の先生。やはり僕としても、こうした機会を利用して「日本語（母語）⇔ドイツ語」という二言語の比較においてドイツ語を捉え直し、翻訳という活動を通じてドイツ語の特徴について考えることは、新たな知見を得ることにつながるだろうと思い、受講を決めました（日頃はドイツ語でドイツ語を学ぶことがほとんどですから）。つまりは自分の母語である日本語という言語の特性と、ドイツ語のそれの間にある相違というものが、翻訳という営みにおいては浮き彫りとなり、かつ重要になってくるという意味です。…と何やらまた複雑なことを書きましたが、単に **Japanologie** の皆と一緒に授業を受けるのは何だか面白そう！と思って選んだところもあります。具体的な授業の様子や内容については、また次号以降に書きますね。

#### ・ **Grundlagen der Phonetik in Deutsch als Fremd- und Zweitsprache** ドイツ語音声学

#### ・ **Zweitspracherwerb und zweitsprachliches Lernen** 第二言語習得と第二言語学習

#### ・ **Theorien und Modelle des Zweitspracherwerbs** 第二言語習得の理論とモデル

さて、以上に挙げた 3 つはいずれも **Herder-Institut** で開講されている **DaF** に関する授業。上記 2 つは **Vorlesung**（講義）、一番下は **Seminar**（セミナー）です。そう、今学期は **Seminar** にも挑戦してみようという意気込みだったのですが（これまた自分が日本でも学んだことのない分野で…汗）、実はすでに **Seminar** 以外の授業だけでもかなり時間割がいっぱいになってきており、ここに（毎週のリーディングや発表準備等で比較的授業外学習量の多い）**Seminar** なんて追加したら、全て破綻しかねない…（相変わらず欲張り）と頭の中でサイレンが鳴り始めているのを聞いた僕は、仕方なく諦めようかと思いつつ、でも今後のことを考えると、ドイツの大学の **Seminar** が一体どんなものか、その雰囲気だけでも掴んでおきたい…と（往生際悪く）思い直した僕は、以下の作戦に出ました：その夜、**Seminar** 担当の先生に以上の事情を説明する長文のドイツ語メールを送り、単位とかは要らないから、どうかその場に出席させてもらえませんか、というお願いをしてみたのです。結果は、本当に **Teilnahmeschein** も何もあげられないけど、それでもいいなら **Gasthörer**（いわゆる聴講生）として受け入れようと言ってくれました。こういうことだってあります。でもおそらく

Ausnahme (例外) です、あんまりマネしない方がいいでしょう (笑)。まあそんな必要性に迫られることもなかなかないでしょうが。各授業の詳細については、紙面の都合上 (便利な言い訳です)、次号に譲ることとします。ぜひ5月以降も引き続き、お付き合いください。

<ドイツ写真館>

今月のもう一つの Big News は何とんでも自分の自転車を買ったこと！ (その理由は先月の当コーナーを読めば明らか。) 中古でランプも合わせてたったの 30€！オンボロでサドルはやや高すぎ (これでも一番低い)、ハンドブレーキは前輪のみ (DDR 時代のチャリンコはこれが主流)、自転車のスタンドはもう壊れて取れた！ (それ4月だったかな?) 友達からはたまに、よくそれで Leipzig の街中走れるね、と。気をつけます、Fahr immer vorsichtig! ドイツの自転車事情は日本と違って面白いので、そのうち機会があれば書きたいですね。



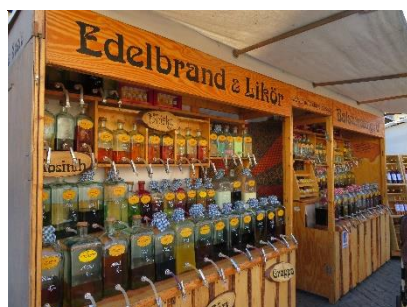
玄関の扉に飾られた  
Ostereier のリース



Bautzen の街を  
練り歩く Osterreiten



桜が満開を迎えた  
Leipzig の Johannisplatz



街の広場で開かれていた  
Ostermarkt の屋台



Weimar の国立劇場前に  
立つ Goethe / Schiller 像



見事 30€で手に入れた  
中古の愛用自転車

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/5/1 ~ 2019/5/31)

### <生活の状況>

さて、日本ではとうとう令和の世が始まりましたね。日本が令和時代に入った瞬間、こちらはまだ4月30日の午後5時で、その日はちょうど日本学科で **Weggeherseminar** (先月号参照) の手伝いをしていたところでしたから、その場に居合わせた **Japanologie** の友人と共に、軽くお祝いしたのを覚えています。平成の世に生まれていながら、平成の世の終わりを見届けられない、というのも何だか不思議な気はしますが、ドイツにいたって日本人である以上、令和の世の始まりを一つの節目としてまた気持ち新たに頑張っていこうと心の中で誓ったのは同じことです。ところでドイツで5月というと、それは長きにわたる寒く暗い冬がようやく終わり、花が一斉に咲き乱れ、暖かい“春”の到来が告げられる美しい時節…なんて言われたりしますが、記憶が正しければ、そこまで劇的に暖かくなったという覚えはありません(汗)。それはともかく今月は、友人の厚意もあって、ちょっとした社会的活動(?)に参加する機会を得ました。かの「日本の家」で開催された **Teezeit** (ティータイム) イベントにて、**BGM** のピアノ演奏を任されたのです。アコーディオンを習い始めたという話は以前ここでも書きましたが、実はピアノはもう長いことやっています、あくまで趣味としてですが。それこそ習っていた教室の発表会で弾いたことは何度かあるものの、こういう公の場で弾くというのは初めての経験。それもドイツで。どうでしょう、日本でもそういう機会はなかなか得られないのではないのでしょうか、ましてや趣味の範囲のピアニストが。それは僕が思うに、日本では音楽に限らず、そうした「公」となるものに対する周りの目、そこに求められる質 **quality** の高さがより厳しいからでしょう。プロないし相応に訓練された人でないと、表、つまり公に出ることは憚られる。それは日本のサービスの質の高さを見ても、同じことが言えます (ちなみにドイツではまず「お客様第一」なんて考え方はなく、例えばスーパーのレジで、今こっちが取り係り中なんだからちょっと待ってなさいよ、なんて場面は極普通です)。もちろんそれは、その質を保証する意味では良いのですが、ひよっとするとその背後で、多くの“小さな可能性”が失われているかもしれません。というのは、今回のように音楽を例に考えると、音楽の街 **Leipzig** に限らずここドイツの街には、多くの **Straßenmusiker**、ストリート・ミュージシャン (僕はあえて“道端の音楽家”と呼びたい) たちがいます。彼らはもちろんプロでもなければ、本当に趣味の域を超えずにやっているという人も大半でしょう。その音楽は、例えばその傍らに立つ殿堂 **Gewandhaus** のオーケストラに敵うわけでもありません。それでも、彼らの演奏に足を止める人たちがいます。彼らの演奏に聴き入る人たちがいます。それは間違いなく、彼らが“プロ”でないながらも自分を表現することで、他の人を幸せにできている瞬間なのです。これが先ほど述べた“小さな可能性”。その道のプロでなくても、自分に出来ることはあるのです。周りの人を少しだけ、幸せにすることは出来るのです。…と、その証拠に「日本の家」での演奏後、ピアニストへ



の **Spende** として皆からの気持ちを受け取ったときは、とても嬉しかったですし、何か報われた気がしました。と同時に、もっと頑張ろうという気持ちになるわけです。もし皆さんも何か一芸をお持ちでしたら、ドイツはきっとそれを「公」にしてみる、良い機会になるかもしれません。もう一つ今月の面白い **Leipzig** 生活ネタとしては、5月11日の夜、隣町 **Halle** をも巻き込んで開催された **Museumsnacht** (博物館の夜) というイベントが挙げられます。これはその名の通り、両市にあるほぼ全ての美術館・博物館が、その日に限り深夜0時まで開館されるという、街をあげての一大イベント (のはずがあいにくの悪天候に見舞われる…)。何ととっても真夜中の博物館だなんて、かの有名な映画の舞台を彷彿とさせますよね! (実際に展示物が動き出したりはしませんでした。) 各施設への入場も共通券 (学生は8€) で全てOK、非常にお得な話であります。僕は **Tandem** も兼ねて友達のドイツ人を誘い、**Museum der bildenden Künste** と **Grassimuseum** という2つの施設を見学、結局最終的には0時までそこにおりました(笑)。その他にも今月は初めてドイツの映画館で映画を見たり、毎度登場する **WILMA** の **Planungstreffen** (企画ミーティング) に顔を出して、その後 **BBQ** パーティーの運営を手伝ったり (そうドイツはこれから **BBQ** の季節!), 日本学科の大教授が「京大・吉田寮」をテーマに始めたいと誘って下さったセミナーに参加してみたり、日本人の先生が教える日本語の授業を見学させてもらったり、ドイツ人の友達に **Bar-Hopping** へと連れられたり、いろいろあって終盤5月25日は、かねてより **Düsseldorf** の友達から「またこの日に戻ってこい!」と誘われ楽しみにしていた **Japantag** (日本の日) というドイツ最大の日本文化イベントへ。本当にたくさんの **Cosplayer** たちを見ました…先の **Leipziger Buchmesse** (本の見本市) を遙かに凌ぐ数で (注: その完成度は人それぞれです)。また何ととっても嬉しかったのは、久しぶりに、それもドイツで、“ちゃんとした”日本の花火を見られたことですね。 **Japantag** のフィナーレとして夜11時に **Rhein** 川の畔から、日本より招聘された花火師によって日本の花火打ち上げが行われるのです。まあ前回ドイツで見た花火といえば、例の **Silvester** 花火騒ぎですから (1月号参照)、そりゃ“ちゃんとした”なんて言いたくなりますよ(笑)。ちなみに我らが千葉県と **Düsseldorf** 市は今年より姉妹提携を結んでおりまして、なんとその調印式が **Japantag** 当日の会場にて行われたため、まさかの千葉県知事を **Düsseldorf** にて目撃することになるという…! 日本でも直で見たことあったかどうか、覚えておりません(汗)。それはさておき、 **Japantag** 後はちゃっかり足を延ばして西欧オランダ・ベルギーを巡る旅へ! そう何度もドイツ西部に来る機会はありませんから、せっかくだからとまずはオランダの首都アムステルダムへ。 **Düsseldorf** からバスでたったの3時間ほどです。素直な感想としては、運河の流れる美しい街アムステルダム、すごく気に入りましたね。オランダ語も (見かけは) ドイツ語に似ていて面白いです。その後は、ミッフィー作品の作家 **Dick Bruna** の出身地として知られるユトレヒト、更にはベルギーに入ってブリュッセル、西部のブルージュという街も訪れました。ベルギーはワッフルやチョコレートを初め本当においしいようなものがいっぱい (だがどれも高い) ついつい目移りしてしまうのですが、それを遮るかのごとく周りを行き交う観光客の多さ

といったら！ちょっと疲れちゃいましたね。でも実はこの旅、ベルギーの後もう少しだけ続くことになります。6月号もぜひ楽しみに。ここまでの旅の写真はいつものコーナーで。

#### <勉学の状況>

さあ今月は先月号に引き続き、今学期から新たに始まった各授業の様子をお伝えすることとしましょう。早くも各ドイツ語の語学の授業では中間的なテストが行われたりして、少し忙しかった時期もありました。ちなみに日本語を学ぶドイツ人の友達とやっている Tandem に関しても、その Partner の数は先学期よりも増えて計 4 人になっていたのでもちろん Tandem は好きなので毎回楽しみです)、忙しさは倍増…でもおそらく僕は暇を持て余すのができないタイプな気がします。そんな僕にぴったりな(?)言葉として、ドイツ語には auf Achse sein という表現があります。「軸の上にいる」という意味。なんでそれが忙しいことになるのか?ちょっと考えてみてください(僕は説明されるまでわかりませんでした笑)。答えは(忘れなければ)来月号にでも書き記したいと思います。では、以下授業の詳細。

・ Sprachpraxis DaF für Fortgeschrittene C1 ドイツ語の集中コース (レベル: C1)

・ Sprachpraxis Grammatik Aufbaukurs C1 ドイツ語の文法の授業 (レベル: C1)

これらの語学の授業では先述の通り、すでに 5 月中 1 回ずつ筆記試験がありました。内容的には授業で扱った文法事項が中心で、短めのまとまった作文をその場で書くという問題も含まれていました。ところで 2 学期目の今学期、なぜこれらのコースを選んだかという動機の説明を先月お預けにしておりましたが、1 つ目の集中コースに関しては、やはり授業の頻度と時間的にドイツ語によるインプットの量を増やしたかったということ(各回 180 分の週 3 回)、担当の先生が昨年 9 月の Sprach- und Orientierungskurs (語学準備コース)でもお世話になった良い先生だったこと等が挙げられます。それから先学期の週 1 の授業のように、やはりクラスメート同士お互い週 1 度しか顔を合わせる機会がないと、どうも授業全体の調子が乗ってこない(クラスの雰囲気は温まらない)ということもあるものです。その点 Intensivkurs はそれだけ長時間ともにドイツ語を学んでいくわけですから、クラスメート同士の交流も密になりますし、実際、授業中の雰囲気も、より活発で、楽しいものとなっています。2 つ目の文法の授業に関しては、文法なんて日本でも十分学べるのでは?と思う方もいるかもしれませんが、されど文法です。僕自身、文法の勉強は好きなのですが、僕はドイツで教えられる「C1 の文法」がどんなものか見てみたかったのです。当然 C まで行くと、もはや基本事項にあたる初級文法は教えられませんし、それは日本の大学の語学の授業でも十分扱われるところですが、ではそれらを終えた後の上級文法として教えられるのは一体どんな内容か?そういう単純な興味です。基本となる文法を一通り全て理解した自分にとって、その領域を学ぶことはさらなる進歩にもつながるはず。そう思って選択したのが、この Grammatik C1 です。まあこうして長々と述べた自身の動機が(例えばドイツ留学を志してこの報告書を手にとっている人たちに)どれほど役に立つかはわかりませんが、現地で授業を選ぶ際、考え方の一つの指標とすることは出来るでしょう。つまり 1 年間

で留学する人は、せっかくなんだから（語学の授業に限らず）先学期 1 学期間の経験をフルに活用して、2 学期目をより良いものとするよう心がけてください、ということですね。

#### ・ **Modernes Japanisch für Fortgeschrittene 2 – Übersetzen und Dolmetschen**

さて、今度は翻訳の授業のお話です。本来、この科目は日本学科修士課程の学生に向け開講されているものなのですが、学期開始時に修士の学生の履修希望者が 1 人しかいなかったため（そもそも **Japanologie Master** は母数が少ないのです…）、学部 6 セメスター（日本でいう 3 年後期に当たるが、基本的にドイツの学部課程は 3 年間）の学生 4 人+我々日本人留学生 5 名が加わって、計 10 人で行われることとなりました。ちなみにここで、ドイツ人の数と日本人の数が等しいのは偶然じゃないですよ。基本的には毎週先生から送られてくるドイツ語のテキスト、主に社会時事問題に関連するテーマの記事、を各自が訳してきて、それを授業時に突き合わせるという形なのですが、その際にドイツ人と日本人で 1 対 1 のペアを作り、授業の初め 30 分ほど「ああでもないこうでもない」と話し合うのです。使用言語は主に日本語です。この日本学科修士の翻訳の授業は、扱いとしては学科の専門科目になりますが、例年日本人交換留学生でも（その専門に関わらず）こうした形で履修する人が何名かいるようです。先月号でも述べた通り、やはり日本語⇄ドイツ語の二言語間の変換のいい練習にはなるでしょう。ちなみに逆の日→独翻訳の授業も同様にありますが、こちらは残念ながら時間割の都合で履修できませんでした。担当は、ドイツ人の日本語の先生です。

#### ・ **Grundlagen der Phonetik in Deutsch als Fremd- und Zweitsprache** ドイツ語音声学

#### ・ **Zweitsprachenerwerb und zweitsprachliches Lernen** 第二言語習得と第二言語学習

#### ・ **Theorien und Modelle des Zweitsprachenerwerbs** 第二言語習得の理論とモデル

こちらの授業は（先月も説明した理由で一番下の **Seminar** を除き）基本的に **Vorlesung**（講義）だけを受けて、**Modul** 全体の単位取得条件課題である **Hausarbeit**（長文レポート）は書かないつもりです。というのも、それを書くには各 **Modul** の他の部分も履修していないと内容的に不可能だということがわかったので…。授業の内容をそれぞれざっと述べると、1 つ目は音声学、つまりドイツ語という言語にはまずどのような音があって、それらが人間の口の中ではどのように発音されているのか。その分類と仕組みを知るところから始まります。**DaF**（外国語としてのドイツ語）という **Kontext** ではもちろん、それが後にドイツ語の発音教育にどう生かされるかという話になるわけです。先生はとても陽気な方で、授業の雰囲気も明るく、活発なものとなっています。2 つ目は、僕が特に興味を持っている分野でもあります。人間が幼い頃に母語を習得した後、例えば授業で外国語を勉強する場合（例えば多くの日本人にとっては学校教育における英語）、その 2 番目の言語はいかに習得され得るか、というプロセスを解明しようとする分野の話です。ほとんどの場合、母国語の習得は 100% 成功しますが、その逆に例えば我々が英語を勉強して、ネイティブのレベルにまで達するというのは稀な話です。また広く一般に、語学が得意な人・苦手な人という言い方も耳にしますが、この「言語習得」にまつわる様々な差異・現象はなぜ生じるのでしょうか。非常に興味深いところでもあります

先生はとても温厚な落ち着いた人で、それゆえ授業にもやや静けさがあります。あと発音的にどこかの方言をしゃべっているのですが、どこかはわかりません(笑)。全体的に Herder-Institut の授業には交換留学生も含め、外国人の学生がちらほら見受けられるように思います。Leipzig 大学には Germanistik (独文学) と DaF の両課程が存在し、後者は比較的新しく成立した分野ですが、ある外国人の Germanistik 専攻の友達が、DaF の学部 (つまり Herder-Institut) の方が外国人留学生に優しく、面倒見がいいと言っていたことがありました(笑)。さて、3つ目の Seminar (セミナー) はどうなったかという、いやはや、やっぱり想定通り授業の“流れ”についていくのが大変です。Gasthörer という扱いですから、そう他の学生と同様に積極的に参加という形ではないのですが、あるとき突然ちらっと質問をされて、「えっ? えーと…」となるわけです。それは、質問の中の単語を知らなかったからそうなるのかもしれないし、純粋に質問の意味がわからなかったからそうなるのかもしれない。…と僕も (よくある日本人の例にある通り) 自分の中でいろいろと考えを巡らせがちなのですが、ふと気づかされたのは、わからなければ何でも聞けばいい、ということです。その場で。だって、ドイツ語が母語でない外国人としてそういう中にいて、わからないことがあるというのは至極当然なことなのですから。それは、実は周りのドイツ人の学生たちも口に出して言わないだけで、わかっています (自分が逆の立場だったらどうか想像してみてください)。僕もそうですが多くの場合、我々は外国人として、何でも「ドイツ人と同じように」と思ってしまふところがあります。しかし当然それには限界があり、実際 100% 同じというのは無理です。それよりはむしろ、その“差異”が何なのかよく認識し、それを補うためにはどうしたらいいか、自分なりに工夫する。つまり、差異を同化によって全て埋めようとするのではなく、差異は差異と認めたまま、自分に出来る方法を模索し、実践する。それが僕の思うに、「外国人として生きる」ということなのではないかと。多くの人は初め、その「同化」にばかり気が行きがちですが、本当に身に着けるべきは、この「外国人として」うまく生きていく方法、これだと思います。…なんて事を考えるきっかけをくれた Seminar での体験談、お付き合い頂きありがとうございました (相変わらず話が長い)。(ちなみに余談ですが、この現地人との能力的隔たりやギャップとして認識される言わば“負の差異”(埋められるべき差異)とは別に、外国人としてその地に暮らす中から次第に発見し得る自分自身 (あるいは自身の文化圏) の特長、“正の差異”(肯定的な違い=多様性の源となるもの) も存在するはずであり、前者の差異については先述通り自分で様々なストラテジーを駆使すること、後者の差異についてはその価値を認め、異文化圏においてもそれを積極的に発揮するよう心がけること、以上を実践すれば、海外でもどうにかいろいろうまくやっていけるんじゃないかと思いました。ではそろそろここで Schluss !)

<ドイツ写真館>

もう今月はいろいろ思いの丈を語ってしまったので書くことがあまり思いつきませんが

(笑)、ちょっとベルギー旅行時の話に戻ると、実はかのファストフードの代名詞、フライドポテトはベルギー生まれだそうです。米国じゃないんですね。フライドポテトが好きな僕は(嫌いな人って聞いたことはありませんが)当然そこで試してみるわけですが、要はベルギーには美味し“そう”なものがいっぱいということです(もう2度目)。“そう”なんて様態の助動詞を用いたのは、金銭的な理由により僕の目に映るに留まったものがあるから…



Japantag フィナーレに  
Rhein 川上空へあがった花火



Utrecht の運河沿いをゆく  
ある静かな小道



Amsterdam の街を  
流れる美しい運河



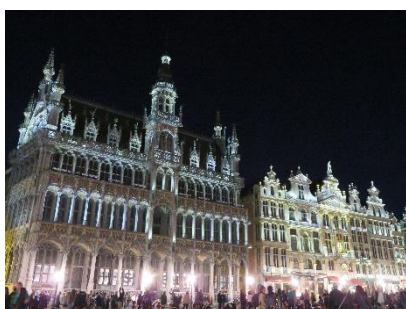
旧教会と  
Amsterdam の夜景



Amsterdam の  
水上 Flower Market



Zaanse Schans の  
長閑な村の風車たち



まばゆい光にあふれる  
夜の Grand Place



Brugge の街で最も  
美しいといわれる風景

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/6/1 ~ 2019/6/30)

### <生活の状況>

さあ 6 月ですが、まずは先月号でベルギーの後もう少し続くと予告した、旅行のその後をお話ししましょう。6 月 1 日の朝 8 時 15 分、空港へ向かう列車が遅れてヒヤヒヤしつつも (空港行きだったはずが途中で終点変更、乗換を余儀なくされる…) 無事ブリュッセル国際空港を飛び立った僕が次に向かった先は、ドイツ Berlin の **Schönefeld** 空港。あれ、ドイツに帰って来てるじゃん。…というのは前日 30 日から母親が 1 週間ほどの旅行で僕を訪ねにドイツへ遊びに来ておりまして、その日 Berlin の中央駅で合流することになっていたからなのです (もちろん、Berlin 観光案内を任されるという大義のもと)。そういうわけでその週末は母親と Berlin を観光して回ったわけですが、私的な話、うちの母親が前に Berlin を訪れたのは、まだ東西分裂の時代、あの **Berliner Mauer**、ベルリンの壁がまさに“壁”として存在していた頃だったのです。母親は当時の東ベルリンにも足を踏み入れています (こう書くと不法侵入に聞こえますが単なる旅行者です)、あの頃の東…それは単調で殺伐とした風景だったと何度も話していました。そんな中、統一から約 30 年の時を経て大きく変化した現代の Berlin の姿を目にした母親は、さぞかしいろんなことを感じたろうと思います。僕自身も東西ドイツ史 (ドイツ語では **Deutsch-deutsche Geschichte** といいます) に興味があるので、ここまでやや紙面を割いて書いてしまいましたが、なにせ僕らの年代ではもう歴史の教科書の中で習ったことですからね…とはいえそれを「本」の中の話で終わりにしない、過去から現代につながる時の流れの中での一つの出来事として捉えるには、歴史の現場、その本物の場所を訪れることは非常に大切だと思います。僕も昨年、それも統一記念日に初めて Berlin を訪れた際、今は **East Side Gallery** として残る“ベルリンの壁”をこの目で見て、この手で触って、いろんな感情が胸に湧き起こったのを覚えています。さて話を戻すと、母親は当然その後、僕の住む街 **Leipzig** にも来たわけですが、そこでまた **Leipzig** ならではの (謎の?) イベントを目撃することとなります。その名も **Wave-Gotik-Treffen**。期間中、街中が黒い衣装に身を包んだ人たちでいっぱいになりました。一体何事? どうやらこれは 1992 年より毎年 **Pfingsten** (聖霊降臨祭) の祝日に合わせて **Leipzig** で開催されている、世界最大規模の黒きゴシック衣装にちなんだイベントらしいです。僕もよく説明できません(笑)。でもとにかく開催中の 4 日間は、これを目当てにやって来た旅行者も含め、大勢の人が黒を基調とした (中にはものすごいドレスの) ゴシック衣装で街を練り歩きます。おかげで僕もカメラを片手に、一日街へ出掛けて行きました(笑)。とこのように **Leipzig** は **Buchmesse** (本の見本市) だけでなく、こんなところでも世界的に有名なのですね。この街は、そこに住む人たちを飽きさせない…その証拠に今月は“音楽の街 **Leipzig**”にちなんだイベントがもう 2 つほど (だんだん **Leipzig** の観光ガイドみたいになってきた)。1 つ目はかの有名な音楽家 **Johann Sebastian Bach** ゆかりの地として“**Bachfest**”。期間中は中心部

の広場で無料野外ライブも行われ、バッハの作品を現代風にアレンジした様々なバンドがその演奏を披露しました。日の長い夏の夜、広場の地べたに腰を下ろして、空がだんだんと暗くなっていく中、その音楽に耳を傾け楽しむ人たち…の一人に僕もなっていたわけですが、なんだかとてもドイツらしい夏の夜だなあと思いつつ、こんな生活こそ理想的と思ったのを覚えています。2つ目は、Leipzig を代表するオーケストラ Gewandhaus Orchester のこれまた無料野外コンサート、“Klassik airleben” です（ちなみに“air”leben とはドイツ語の動詞 erleben 「体験する」を“air を通して体感するクラシック”としてもじったもの）。これは Leipzig の Rosental という広大な原っぱ（公園？）を会場として、毎年この時期に2日間の日程で行われる催しで、通常は高いお金を払ってチケットを買わなければ聴けない Gewandhaus Orchester の演奏が、この日だけは無料で！という話です。実際、多くの人が詰めかけていましたが、それでも広い草原にわたる音響設備は抜群、これまたドイツの夏はいいなあと思いつつながらその音色に聴き入りつつ、その隣では友達が簡易式BBQをしていて、コンサートの後は一緒に飲んで騒ぐわ、仕舞いに原っぱに寝転がりだすわ、なんとも楽しい夜でしたね(笑)。さて、それはともかく Leipzig はよく住みよい街だ、と言われます。かれこれ僕もここに9か月ほど暮らして、それには大きくなすけすけし、この意見は他の各国の留学生の友達からもよく聞くところでもあります。我々のような学生にとってはやはり、大きな総合大学 Universität Leipzig を中心に発達する学生街としての魅力（娯楽商業施設、課外活動の幅広さ、キャリア形成上の Praktikum（企業実習）の豊富さ等）が理由の一つとして挙げられると思いますが、それ以外の部分でも Leipzig がこうして多くの人に愛されているのは、僕が思うに、この街の“活”と“静”のバランスがちょうどよく保たれているからではないかと。つまり“活”というのは、上記の学生街としての側面でもあり、前項でも触れた1年を通して様々なイベントが行われているという事実でもある。要は常に何か楽しいこと・面白いことが街のどこかで起こっていて、いろんな可能性に満ちあふれている、ということ。一方で“静”とは、そうでなく静かにのんびりゆっくり過ごしたい、そういう気分の時でも Leipzig にはきちんとそれに答えてくれるものがあるということ。それはこれまでも何度か登場した Cospudener See の湖の青だったり、街の中心地を囲うように広がる Auerswald の公園の緑だったり、週末の教会の中に響き渡るオルガンの音色であることもあれば、カフェで友人との会話越しに漂うコーヒーの匂いかもしれない。自分のテンポで、自分の時間を生きる。その中に“静”あり“動”あり。もしかするとそれが Leipzig の人々、“Leipzigiger” たちの生き方なのかもしれない。そしてそれは、他でもなく、それに応えるよう発展してきた今日の Leipzig という街の在り方なのかもしれない。そんなことを思わせてくれる素敵な街がここ、Sachsen 州の Leipzig なのです。今月号は何やら Leipzig の魅力紹介特集のようになってしまいましたが、こうして9か月住んでいても飽きるどころか益々その魅力に気づかされる場所なのであり、もしもこれを（ここまで一生懸命）読んでいるあなたがドイツのどの街へ留学に行くべきか悩んでいるようだったら（千葉大学はドイツにたくさん協定校がありますからね）、ここにこういう情報を書き残しておいて、無駄には

ならぬというものです（そう願っています）。僕は協定校のある街を全て訪れたことがあるわけではありませんが、もちろん、自信を持って **Leipzig** をおすすめすることができます。それは僕が **Leipzig** に来たからかもしれませんがね。「住めば都」という言葉だってあるぐらいですから。でもそういう意味では、もしあなたがこれを読んでいて、まだドイツ留学に行くべきかどうか悩んでいるのであれば（または単にドイツに興味があり、旅行先として選ぶかどうか検討中なのであれば笑）、行ってみるのがいい！と言えます。自分も渡航前に一時、そのような立場にいた身としてね（注：旅行先としての場合はもちろん即決定ですよ）。

### < 勉学の状況 >

さあ、今月の勉学の状況はというと、とにかくドイツ語の集中コースにおける試験や発表の準備で忙しかったような気がします。6月の1週目にはまず2回目の筆記試験（**Erörterung**）を書く：1つの命題に対し、賛成反対の両意見を挙げ、最後に自分の意見を論述するというもの）があり、その2週間後には口頭試験その1として、個人で20分ほどの **Kurzreferat**、短めの発表をし（テーマは自由、僕は日本の自衛隊を取り巻く問題について紹介しました：かつて授業でクラスメートの出身国の軍隊の在り方について話し合った際、やはり日本は特殊だったので）、そしてそのわずか1週間後に口頭試験その2として、実は学期初めからグループを決め、準備を進めていた（進めているはずだった）**Gruppenprojekt**、グループプロジェクトの30分程度の発表がありました。というわけで6月後半は、まず個人発表の準備を進める傍ら、その後に控えるグループ発表のため度々グループメートと授業外にも会って準備したりして…という感じで、なかなかハードでありました。というのもそこに、風邪を引いて熱を出すという災難も降りかかってきたわけですから…やはり健康第一です。あえて言えばそこにプラスして、毎週の独→日翻訳課題があったわけですし（ちなみにテキストのテーマは福島原発問題や日本の経済格差問題、2020年東京オリンピックなど様々）、語学の授業のもう一方、文法C1の授業から宿題が課されることもありました。ここまで6月の最後にいろいろ押し寄せてきたのは、単にこの夏学期が授業期間としては翌月の12日までで終わってしまうことに起因しており、先学期末も述べたと思いますが、語学の授業を受け持つ **Studienkolleg** では、その試験実施期間の感覚が大学の一般の授業より1、2週間早いのです（よって6月の終わり）。そのため今月は特に、**Herder-Institut** の方で履修していた **DaF**（外国語としてのドイツ語）の授業内容まで十分にフォローアップしている余裕がなく、やや消化不良となってしまったことは否めません。とはいえ、6月28日に先述の **Gruppenprojekt** の発表が終わった時は、それで基本的に集中コースの試験課題が全て終了したわけですから、とても晴れ晴れとした気持ちになりましたね！さて、今月の当欄は授業ごとに区切って各詳細を述べる方式をやめたので

何となく短めで終わりますが（いや、これぐらいが適度な長さなのかもしれない）、そういうわけでこの夏学期も残すところあとわずかとなっていることを実感し、残された時間で出来ることは何かと、再びいろいろ考え始める僕でした…



<ドイツ写真館>

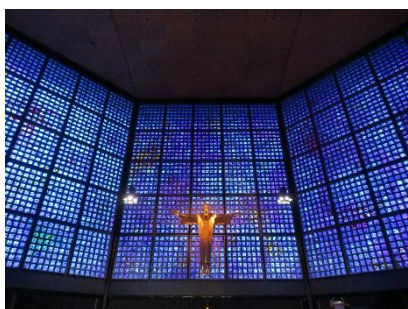
今月びっくりしたものの、それは6月1日に Berlin へ降り立った僕を待ち受けていた「猛暑」です。まだ6月の頭だというのに、ドイツはもうこんなに暑くなるのか！（おかげでうちの母親が日本の夏を引き連れてきたのかと疑ったぐらい。）こちらに梅雨の時期はないですし、ヨーロッパの夏も近年は普通に暑いのでは…と心配していたら、その数日後に再び涼しくなってくれました。それでも暑いときは暑いです。そしてクーラーがないときはないです。



Wave-Gotik-Treffen で  
自慢の衣装を纏うカップル



かつては壁により分断された地  
Potsdamer Platz



戦争の悲惨さを伝える  
Kaiser-Wilhelm 記念教会



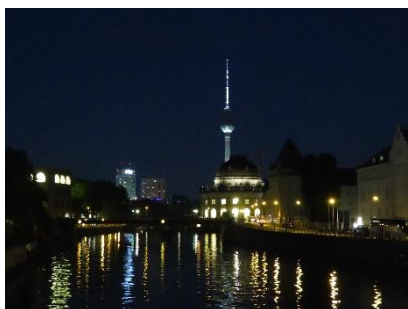
現代の Berlin に残った  
Berliner Mauer



Leipzig 郊外にある  
遊園地 Belantis



Elbe 川の対岸に見える  
Dresden 旧市街



Spree 川越しに望む  
Berliner Fernsehturm



夏の野外コンサート  
„Klassik airleben“

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/7/1～2019/8/4)

### <生活の状況>

時間が経つのは速いもので、もう7月、2学期目最後の月となりました。それでもこのヨーロッパ・ドイツの地にいられるものなら出来る限り長くいたいと(そしてわざわざ蒸し暑い日本の夏へは帰りたくない)、僕は、千葉大学で次の学期が始まる少し前(そして自身の学生ビザが切れる少し前)の9月末に帰国することを決めました。が、こちらで2学期間を通して知り合った多くの留学生たちは、すでに今月から一人、また一人と母国へ帰り始め、わかってはいたものの、多くの別れが度重なった月でありました。…と書きつつ、実はそうした惜しいお別れの第1号はすでに先月28日に始まっておりまして、それはかの11/12月拡大号でもお話した、クリスマスに実家へと招いてくれたポーランドの友達との別れです。今思えば彼女は、僕が入学手続きのため初めて大学に行った日、待合室にてたまたま僕の隣に座っていた人でもあったんですね。なんという偶然。それで彼女は、自分がLeipzigを去るその28日夕方、僕を含め親しい友人たちを例のCospudener See湖畔へと呼び集め、ともに湖の向こう側へと沈んでいく夕陽を見ながら、Leipzigでの最後の時間を過ごしたのです。なんという美しき留学生活の締めくくりでしょう。(ちなみにそれがその後、帰国を控えた留学生の間でやや流行りとなり、僕が知っているだけでも2、3人は同じことを企画してから帰っていきました笑)お別れに際したAbschiedsfeier(送別会)は、こちらで知り合った他の日本人留学生の友人の間でも度々行われました。僕としては、そうしたFeierへ招かれる度、その場に居合わせた帰国前の様々な友達にも再会できて嬉しかったのですが、そうは言っても周りの皆が少しずつLeipzigを離れていくと、「ああ、彼は/彼女はもう明日からあそこを訪ねてもいない」と、頭の中で無意識のうちに持っていた自分の「Leipzigの地図」から彩りともいべきものが一点、また一点と消えていくのです。“交換留学生”というのは、まさしくそうした限られた時間をその地で過ごし、やって来てはまた去って行く者、そういう動的存在であるのでしょうか、同じようにしてLeipzigという大学街も一つの1年周期の変化を、毎年のごとく刻んでいるように思います。たとえそれは部分的な変化であったとしても、そういう中に、自分も一人の交換留学生として存在している。そんな実感を覚えます。…というところで、先月もお話したように7月12日までで夏学期は終了し、それを祝って(?)友人の協力の下、日本学科を中心にして念願だったGrillfeier(BBQパーティー)を自分が言い出しっぺで企画したのですが、なんたる不覚、確定した日時の翌日に日本学科の2・4学期生(つまり全体のおよそ3分の2)はまだ日本語の試験があると(汗)。それなのでやや参加者数が心配された当日でしたが、試験がすでに終わっている人や試験前の息抜きにという人、その他自身の友人や日本人の留学生も集まってくれて、最終的に20～30人ほどの参加者を数えるイベントとすることが出来ました。なぜ念願だったかって?それはやっぱり、ドイツの夏といったらバーベキューだからです(笑)。美味しいソーセージ

にビールがあって、夏の夜はこれだけ日が長いこの国で、それをやらない手はないでしょう。というのはあくまでも持論ですが、楽しいひとときを過ごせた 1 日でした。そうして少しずつ Leipzig を去る仲間たちに別れを告げていく中、僕自身は 7 月 23 日、とうとう（これまた念願だった）イギリス London へと飛び立ちました！今回はその London も含め、これまでドイツ滞在中に 1 度は行きたいと思いつつ、まだ行けてなかったヨーロッパの 3 つの大都市、イギリス London、スペイン Barcelona、フランス Paris をすべて格安航空で飛び回るといふ 2 週間ほどの旅行を計画しました。特に英国 BBC の人気ドラマ SHERLOCK から入り、Arthur Conan Doyle の原作 Sherlock Holmes まで導かれた両作品の大ファンである僕にとっては、Baker Street はじめ有名なオリジナルの場所を多く残す London はかねてより憧れの地でしたし（いわゆる聖地巡礼…ドラマのロケ地巡りも楽しみました笑）、何といても London という街が持つ歴史の重厚さは、その建築物を見ていても、博物館のコレクションの数々を見ていても、ひしひしと伝わってくるものでした。幼い頃より話には聞いていて「いつかは自分も」と夢見ていた場所に、実際立つことが出来たのは大きな喜びです。自分もずいぶん遠いところまで来たなあと思いました。ちなみに British English はやっぱりかっこよかったですし、予想通り pound による物価は高くて目が飛び出しましたが、これも実際に行ってみるからこそ実感できるものです。と、この調子で残りの旅行記を書き続けると紙面が足りなくなるのでやや簡略化していきますが、スペイン Barcelona 訪問の目的は何といてもやはり、かの天才建築家 Gaudí がこの世に残した未完の作品 Sagrada Familia 教会を見ること。この聖堂の美しさはその外見からも知られるところですが、その内部に広がる（Gaudí の言葉を借りれば）「森」の空間、その美しき神聖さには言葉を失います。かつそれは単に建築として美しいだけでなく、神にささげられたいわば「石の聖書」として、教会の細部に至るまでのあらゆる部分が、聖書に基づく重要な意味を持っているのです。Barcelona は海沿いに位置する街で、滞在中は天気に変恵まれたこともあり、スペインの夏らしい気候と風景を楽しむことも出来ました（おかげで撮った写真を友達に送ったら、日焼けしたねと笑）。（ちなみに Barcelona に移動する 2 日ほど前、突然メールにて空港におけるストライキにより予約していたフライトがキャンセルになったという知らせを受け取った時は、旅慣れてきた僕でもやや焦ったのを覚えています…汗）さっきから全く簡略化できていませんが、最後に訪れたのはフランス Paris。多くの観光客が訪れる、観光地の代名詞ともいえる場所ですね。この夏のシーズン期、どこへ行っても人、列、人、列の有り様には正直疲れました…なんて以前イタリアへ旅行した際にも書いた気がしますが、それこそその当時友人から、統計ではフランスが年間観光者数 1 位なんだよと教えられ、にわかに信じなかった自分がいたものの、この度の Paris 訪問を通じて「やっぱりそうかな」と思えるようになった自分がいたのです（笑）。そういう意味では Paris を西に 300km ほど離れたノルマンディー地方の海に浮かぶ島、Mont Saint-Michel を訪れた日帰り旅行はその例外になるかと思いきや、狭い島内に一步入ればそこは観光客で埋め尽くされており…ヨーロッパの夏の旅行シーズンの恐ろしさを知りました（汗）。聞くところによれば、最近

はフランスもそうした増え続ける観光客を捌くのに大苦勞しているようです。ただでさえ人手不足のところ業務は増える一方、それゆえにストライキが起こることもしばしばとか。今はテロの影響も少しずつ収まってきて、再び観光者数は上昇の一途をたどっているのです。それでも僕が驚いたのは、パリのリヨン駅にてロッカーに荷物を預けようとした際、そのロッカー室に入る前に、空港と同じように全て機械で荷物検査されたこと。今回訪れた3都市ははじめヨーロッパの観光地では今、こうした安全検査がほぼ全ての観光名所にて入場前に必ず行われています。皆、チケットを買うのに並ぶのではなく、この検査のためにまず並ばなければならないのです。そうすれば当然、先述のような増え続ける観光客を巡る問題も大きくなっていくでしょう。こうした対策はもちろんテロの危険性に備えてのものですが、考えてみれば現代のテロ問題は単に「治安に対する脅威」としてだけでなく、このような形で国の「観光業」に、さらにはそこから発展して人々の「労働環境」に、多大なる影響を与えているのです。話はそれてしまいましたが、そんな事情もあって今はどの観光名所もあらかじめオンラインでチケットを予約していないと当日に行ってその場で買う、なんてことが出来ない状態になっています。なかなかふらっと気軽に旅に出られる時世でもなくなってきたのですね…というわけで、いろいろな現状を目の当たりにしつつも上記3都市を巡って、Parisからの帰り、友達を訪ねるため西のDüsseldorfに立ち寄る形でドイツに戻ってきた僕は、なんと不覚にもそこで足首を捻挫してしまい…(自分のせいです) Leipzigにはその後無事帰ってきたものの、痛みはすぐには引かず、これ、どうしたものかと(汗)。一度病院に行って診てもらわなければならないかという考えが頭をよぎりますが…? 来月号に続きます。

#### < 勉学の状況 >

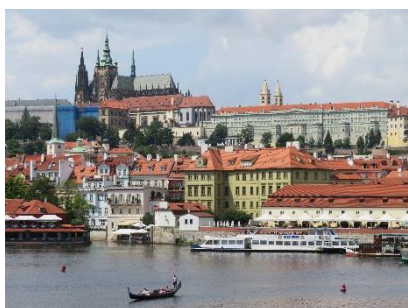
さて、前半でお伝えした Abschiedsfeier (送別会) に対し、ドイツ語の集中コースの方では Abschlussfeier (修了パーティー) が行われました、それも先生の友人が持つ小さな可愛いお庭にて! ドイツはこういうところも何でもありませんね。皆で食べ物や飲み物を持ち寄って、長閑な昼下がり、ピクニック気分であったりとした時間を過ごしました。千葉大学でも学期ないし1年の授業の終わりに、こんな感じの催しでも一つやってみたらどうか? なんて思いましたが、日本の場合は学生が各自飲みに行ってそれで満足ですかね(笑)。まあそれはもちろん、こちらのドイツ人の学生にとっても同じことですが。(もしかすると千葉大学の留学生向け日本語の授業では、そんな企画があったりするのかな?) 何はともあれ、これが Intensivkurs のクラスメートの皆とともに過ごす最後の時間となりました。先々月号で自分なりに今学期この集中コースを選んだ理由をいろいろ述べましたが、結果的には良かったと思っています。自分が期待していた通りの利点、というものもやはりありました。ただあくまで客観的に、今後の人のためにも、いくつかマイナス点を書いておくと、やはり1回180分というのはやや長すぎる、しかもそれが水曜日から金曜日にかけての3日連続ですから、週の終盤というのは何となくクラス全体の士気も下がってきますし、学期の終盤に至っては他の授業の試験で忙しいためや、内容がややマンネリ化してきたこともあって、

授業に顔を出す人の数が次第に減っていきました。まあそうは言っても学生、その時その時自分にとって何が一番重要かを判断して授業に行く／行かないを決める権利があり、それこそ授業に来るはいいが座って聞いているだけじゃ大して意味がないわけですから、僕は学期末のそうした状況も、あって仕方がないものかと思います。ちなみにこの学期を通しての **Intensivkurs C1** から最後にもらった成績は最も良い 1,0 で、嬉しい結果ではありましたが、自分としては、自身のドイツ語力はまだ完全に C1 には達していない（特にその語彙量において）と感じているので、これからも一層頑張っていきたい所存です。もう一つの文法の授業、**Grammatik C1** からも 1,3 という良い成績をもらうことが出来ました。さて大学の専門科目の方で履修していた日本学科 **Japanologie** の翻訳の授業、および **DaF**（外国語としてのドイツ語）の **Herder-Institut** の 2 つの **Vorlesung**（講義）については、学期末に **Teilnahmeschein**（参加証）をもらうという形で、その受講を無事終了しました。この制度については先学期末も説明したところですので割愛しますが、それぞれの授業から **2 ECTS Credits**（ヨーロッパの大学における単位互換を円滑化するための共通の単位で、**European Credit Transfer System** の略）をもらっています。こちらは授業への参加に対して単位を付与しているだけなので、いわゆる成績というものはつけられません。こうして 2 学期目を振り返ってみると、あつという間だったなという気がしてならないのですが（まあ先学期はクリスマス～年末年始の冬休みを挟んだりしていたという事実もあります）、それというのも今学期はどうやら授業を少々取りすぎた(?) かもしれません。こちらの授業は基本的に 1 コマ 90 分ですから、それで計算すると毎週計 11 コマの授業があったことになりませんが、あるとき他の日本人留学生たちとそんな話をしていたら、明らかに多いということが発覚しました(汗)。4 月号でも書いた通り、これでも **Seminar** の正規履修等は断念して自制した方だったんですけどね…というわけで、相変わらず自分で自分を忙しくしていたのですが、だからこそ、僕がドイツで興味を持った **DaF** の分野の勉強には、もっと時間をかけてしっかり取り組みたかったという思いがあります。何というか、よく言われる言葉ですが、自分の中では不完全燃焼に終わってしまっているんですね。純粹にこれをもっと学んでみたい、特にその外国語習得・第二言語習得という **Kontext** において。そしてそこで得られた知見をもとに、画期的でより効果的かつ楽しい外国語学習法を生み出すことが出来たら、それは多くの人のためになる。中にはきっと、外国語なんてわからなくたって意思疎通ぐらいどうにかなるでしょという人もいるだろうけど、少なくとも僕自身の世界は「外国語」のおかげでここまで広がり、ここまで豊かなものとなったし、その「外国語」が秘めている可能性は他の多くの人にとっても同じことだと思う。要は「外国語」を通して得られるものが（それは単なる情報量にとどまらず）想像以上にたくさんあるということだ。よく外国語はツールに過ぎないと言われるけど、もしそうした「外国語」を学ぶことが、その人の人生そのものをより面白い方向へと導き、より豊かなものへと昇華させてくれるのだったら、僕はそれを十分に尊重して、ただのツールなどに見下すことなく、「外国語」とそれ自身が秘める多くの可能性に胸を躍らせながら、その **Sprachen** を学んでよい、と伝えたい。…と、またまた

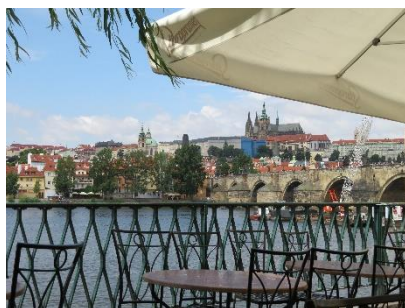
自分の思うところをいろいろ語ってしまったので、今月は一つ、ここらで締めにしましょう。

<ヨーロッパ写真館>

上には書きませんでした、今月は実のところ友達の提案と一緒に“二度目の Praha”にも行ってきたので、その写真も一緒に。今は「懐かしき川よ、モルダウの…」と聴くたび、あのモルダウ川対岸のプラハ城を望む、百塔の街並みが目に浮かびます。ところで今月は、1月より続けていたアコーディオンのレッスンも終わりを迎えた月でした。およそ半年、腕前はまだまだですが、アコーディオンという楽器の難しさと楽しさがわかるまでにはなりました。辛抱強く教えてくださった先生に感謝です。それでは、夏の旅行の断片たちを。



Moldau 川越しに望む  
プラハ城とその大聖堂



Smetana 博物館脇から  
眺めるカレル橋



夜の London の繁華街  
Piccadilly Circus



この Café がどこか  
わかった人は偉い！



Gaudí の創り出した  
神聖なる「森の空間」



今なお建設が進む  
Sagrada Família 教会



Tour Eiffel の奥へ続く  
シャン・ド・マルス公園



海の上の修道院  
Mont Saint-Michel

## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/8/5 ~ 2019/8/31)

### <生活の状況>

すみません、先の月間報告書を執筆してから相当な時間が経過しております…改めて書き始めるために過去の自分の報告書を少し遡って読んでいましたが、長いですね(笑)、要約という言葉を知りませんね、でもそれだけ事細かに伝えたいことがあったんでしょうね。…と今はすでに当手を振り返る視点にあるわけですが、それでもこうして執筆させていただきます。そういう意味では、これだけ時間が離れていると、“要約”もようやく可能になってくるものかもしれません(笑)。さて、先の7月号の締めくくりは足の捻挫で **To be continued** となっていたようですが、果たしてその後、初のドイツ・病院アドベンチャーへ挑むこととなりました。向かった先は **Leipzig** 大学の附属病院 **Universitätsklinikum**。いざ僕も医者に診てもらおうと思いついたものの、その行き先には少々悩みました。聞くところによれば、本来は(日本でもそうかもしれませんが)何か病気や怪我をしたとき、まずは個人の医者が開いている一般の診療所 (**Allgemeinarzt** と呼ばれる) へ行くのが普通で、大学病院は基本、予約を取っていないと診てもらえないし(そしてドイツのことだからその予約を取るのに数週間かかるなんてことも)、他の一般の医師からの紹介状が必要な場合も多いとのこと。…と聞きつつ、僕は(ある友人が予約なしでも診てもらえたと言ったのを信じて)大学病院へ乗り込んだわけですが、まあお陰様で病院中を(片足引きずりながら)ぐるぐる回る羽目になりましたね。幸いドイツ人の友人が付き添ってくれ、なんとか最終的に行き着き、診てもらえた先は“**Notfallaufnahme**”、「緊急時受付」でした。そんな“緊急事態”に当たる程の痛みではなかったのですが、要は予約なしで診てもらえるのがここだけなのでしょう(笑)。少々強引な手だったかもしれませんが、無事にレントゲンを撮ってもらい、診察の結果は(下手に骨折なんてしてたらどうしよう…とヒヤヒヤしましたが)“**Gebrochen ist nichts.**”、折れているところはなく、おそらく単に捻挫とのことで一応の鎮痛剤を処方してもらい、事なきを得ました。別にこの報告書の読者にとって僕自身の病状はいつでもよい事でしょうが、「ドイツでの(やや強引な)病院のかかり方」として僕の経験が少しでも参考になればと思い、紙面を割きました。お陰様でこのアドベンチャーの後、僕自身もドイツの病院事情がわかってきて、なんとなく安心感というか、自信なるものが生まれたのを覚えています。何に対する自信かって? 「自分もドイツで暮らせる」ということに対する自信です。人間、何でも自分で経験してみなければわかりません。経験すると人は強くなれます。経験すると人はそこから物事を語れるようになります。そういう意味では今回、大事には至らず、この程度の怪我で一通りドイツの病院事情を知ることが出来たのは、(ポジティブに考えれば)良かったのかもしれません。なんて言いつつ、その後しばらくは外出を控え、家にこもっていなければならなかったわけですが、その間に会う約束をしていた友達が皆、代わる代わる僕を訪ねに来てくれ、とても心温まる思いがしました。そんな素敵な人とのつながりという

と、今月はもう一つ嬉しい **Überraschung** (サプライズ) がありましたね。渡航前まだ千葉大学にいた頃に仲良くなったロシア人の留学生の友達2人が、僕と他のドイツ人の友人を訪ねに、なんと **Leipzig** まで遊びに来てくれたのです！日本でもロシアでもなく、ドイツで再会が実現したというのは何とも予期せぬことでした。彼らは皆、千葉大学に **J-PAC** 生として1年間留学していたわけですが、やはり“交換”留学とはこういうものなのではないかと。つまり、協定を結んだ世界各地の大学と千葉大学の間を様々な学生が行き来し、お互いはその留学の中で様々に出会い、知り合い、仲を深め合っていく。そしてその関係は留学が終わりを迎えた後の将来に亘ってもきっと末永く続いてゆき、いずれまたお互いが“交わる”ときがやって来る…というように。実は今月、そうして叶った **Wiedersehen** (再会) がもう一つありました。ドイツから遠く離れた北欧フィンランド、ユヴァスキュラの地にて。8月20日の朝、**Leipzig** から直線距離でもおよそ **1450km** 離れたその街に住む友人のもとを目指し、僕と同じく彼を知る3人のドイツ人の友達は、いざそろって飛行機に…ではなく車に乗り込みました。…えっ？ そう、ヨーロッパを縦断する冒険の始まりです！なんと我々は(僕も初めプランを聞かされたときはビックリしましたが)車で **Leipzig** を出発し、陸路で(途中フェリーも使用)フィンランドまで向かう計画を立てたのです。陸続きのヨーロッパだからこそできる **Road Trip**、いやはやこれぞ男のロマンです(ね、とある知人から言われました)。1日目は **Leipzig** からデンマーク・コペンハーゲンまで、2日目はそこからさらにスウェーデン・ストックホルムまで、3日目はフィンランド・トゥルクへと渡るフェリーの上で夜を過ごし、4日目にしてとうとう目的地であるユヴァスキュラにたどり着きました。一度は経験してみたいと夢見ていたフェリーの船旅、甲板から眺めた景色も、狭いキャビンでビール片手に皆でプレイしたカードゲームも忘れられない思い出です。またドイツから北上し北欧諸国を通り抜けていく中、一貫して感じられたのは北欧の国々の平穏さとその澄んだ自然の美しさ。どの街を歩いている、そこにはどこか落ち着いた空気が流れていて、特にフィンランドでは目の前にふと現れる湖一つ一つの景色が本当に息を呑むほど美しい。再会を果たした友達の案内のおかげで、滞在中は伝統的なサウナをはじめフィンランドの魅力を存分に満喫。友達と過ごす本当に楽しいひとときでした。こんな遠いところまで(車の後部座席に座りっぱなしだった)僕を連れてきてくれたドイツ人の友人たちに感謝です。**Vielen Dank!** やはりこの世界は広い。まだまだ見たことのないものがたくさんあります。それは日本で生まれ育った僕にとっても、ヨーロッパの中のドイツで育った彼らにとっても同じこと。本当はもっと色々とお伝えしたいこともあります。それを書き始めたらまた旅行記になっちゃいますので、この辺で。興味のある人はぜひ終わりの写真館をご覧ください。それでも物足りなければ個人的にご連絡を(笑)。え、ちなみに最後、ドイツまでの帰り道はどうしたって？すみません、僕は一足先に **Leipzig** へ戻らねばならぬ用があったので、帰りはヘルシンキから飛行機で飛びました(笑)。あつという間の空の旅です。でもこの日、飛行機の **Berlin** 到着が遅れ、見事帰りのバスを逃した僕は、残り3人のドイツ人がバルト三国経由の東回りルートで再びドイツを目指す中、独り空港の床で一晩を明かしたのでした…



## <勉学の状況>

さて、大学での学期も終了し、今月の“勉学”はどうだったのかな？と聞かれば、上にも書いた通り、捻挫したり、病院行ったり、友達が訪ねてきたり、友達を訪ねに行ったり…で、ほとんど勉強する時間はなかったというのが事実です。が、僕は9月末の留学終了までに、一つ大きな目標を設定しました。それは、9月に行われる **DSH (Deutsche Sprachprüfung für den Hochschulzugang ausländischer Studienbewerber** : 外国人大学入学志願者ドイツ語試験) に合格することです。これはその日本語訳が示す通り、ドイツ国内の大学に正規で入学することを目指す外国人学生が、その語学能力証明のために受けるドイツ語試験。要はこの試験に合格すれば、(語学力上は) 外国人であってもドイツの大学にて正規で学ぶことが許されます。ゆえに、試験のレベルは **CEFR** (ヨーロッパ言語共通参照枠) でいうならばおよそ **C1**。実際、外国人がドイツの大学に入学する上で必要となる語学能力の証明には **Goethe-Zertifikat** や **Test-DaF** の結果によるものなど、他にもいくつか方法がありますが(各大学や希望する学科・コースによって違います)、その中でも僕が **DSH** を選んだ理由には大きく次の3つが挙げられます。1) 受験料が他より安かったから。といっても150€はかかったのですが、**Goethe** や **Test-DaF** だと1回の受験で200€以上はするらしく…(汗) 2) **DSH** はドイツでしか受けられないから。そうなんです、**DSH** 試験はドイツの各大学においてのみ行われ(実はそれゆえ大学ごとに問題や出題形式も違う)、毎学期開始前のタイミングにしか受験できません(基本年2回)。日本に限らず、海外からの遠隔受験は不可能です。3) 夏学期に受講していた **Intensivkurs** で **DSH** に向けた対策も少しやったから。これは考えてみれば当然ですが、語学コースを開講している **Studienkolleg** 自体が **Leipzig** 大学の **DSH** 試験実施も担当しているわけで、それゆえ自然と **Intensivkurs C1** の授業内容もそれに向けられたものとなることがありました。そのおかげもあって、問題形式については他の試験より少し馴染みがあったと思います。以上、僕なりの理由を列挙してみました。もしも読者の中にドイツの大学へ正規入学することを目指している人がいたら、ぜひ参考にしてください。じゃあ僕自身はなぜ、そもそも **DSH** を受けようとしたかって？一つには、留学を終える前に何かしらの方法で自身のドイツ語力を証明しておきたかったということ、もう一つには、やはり将来的にドイツへ戻ってきて、ドイツの大学で学びたいという思いが内にあることです。それがどういう形で実現するかはまだわかりません。が、先程も述べた通り、外国人として語学能力証明が必要なことに変わりはありませんので、だったらそれを今のうちにクリアしておけば、と考えたわけです。さて、**DSH** についてもう一つ言っておくと、この試験はあくまでもその名の通り大学入学志願者対象のものですから、**Goethe** のような一般の語学試験と違い、結果は **CEFR** 基準ではなく、**Stufe 1,2,3** で評価されます(多くの大学は入学に **Stufe 2** 以上(= **C1** 相当)を要求)。そのため **CEFR** に基づく一般的な語学能力証明にはならないこともありますが、ドイツの大学入学を目指すのであれば、**DSH** は一番の近道だと言えるでしょう。ちなみにもちろん日本の「独検」は、国際的には **nicht anerkannt** です。よ。 **DSH** 受験に向けた(青春)試験勉強 **Story** は、最終号に書き記します。

<北欧写真館>

北欧の魅力は、前々項でも語った通り。特にフィンランドは、某キャラクターや某デザインブランドの影響で日本人の間でも人気が高いのではないのでしょうか。実際、ヘルシンキでも行く店に行けば、たくさんの日本人に出会えます(笑)。また北欧はよく「英語がちゃんと通じる国」と言われますが、事実、親切に英語で即対応してくれた率は高かったように思います(ドイツはどうか笑)。でもだからといって、各々の国で話される多種多様な言語を尊重し、それを学ぼうとする姿勢を忘れてはいけませんよ。ただフィンランド語は、世界の中でも最も難しい言語の一つらしく、何とんでも「格」だけで15種類もあるのだとか…



欧州最古のホテルの一つ  
Hotel d'Angleterre

運河沿いにカラフルな  
家屋が立ち並ぶ Nyhavn



Stockholm へ向かう  
車窓から眺めた景色

過去の数々の偉業を今に  
伝える Nobel 博物館



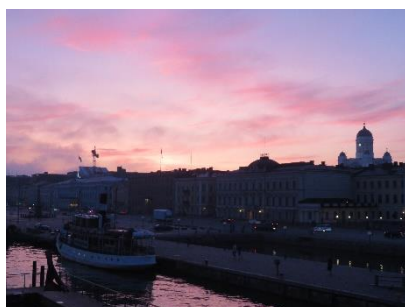
着々と出港準備が進む  
Turku 行きフェリー

Jyväskylä のとある  
美しき湖の夕暮れ



元老院広場前に佇む  
Helsinki 大聖堂

夕闇が迫り来る  
Helsinki のエテラ港



## 海外派遣留学プログラム月間報告書 (Universität Leipzig)

(報告期間：2019/9/1～2019/9/30)

<生活の状況>

**Die schönste Zeit meines Auslandsjahres** — “僕の留学の中で、最も美しい時間”、それは一体いつやって来るものなのでしょうか。それはやはり、留学の最後に訪れるのでしょうか。ともすればそれは、同時に最もつらく悲しい時間でもあるのかもしれませんが。留学最後の1か月、僕の場合はどうだったのでしょうか。多くのことを学びました。多くのことを経験しました。ドイツを去る前、やはり離れたくないと涙を流しました。それほどにこの1年間が、僕にとって美しい時だった。そして心に決めました。また必ずこの地に戻ってくると。また必ずこの人たちに会いに来ると。紙に書いた四角い9月のカレンダーは、日に日に予定で埋まっていきました。9月29日の欄に書かれた「帰国」の字へと向かって。ここまでしか、時間はない。何週間後の今は、もうここにはいない。そうした事実が、僕を様々なことへと駆り立てたように思います。そのとき、人は本当に素直になる。残された時間は、限られているから。僕がここを去る日は、もうそこに見えているから。その中でやりたいことはもう、今しかできない。会っておくべき人にはもう、今、会っておかなくちゃ。**Die schönste Zeit meines Auslandsjahres** — そう思わせてくれたのは、今月、あるドイツの田舎に住む家族のもとを訪れたときでした。帰国2週間前のことです。考えてみればドイツ人の家族のもとへ招かれたのは、これが初めてだった。2日間だけだったけど、僕がそこで体験したのは一なにげない、でも大切にしたい、家族でともに過ごすひとときの一瞬一瞬でした。のどかな田舎の澄んだ自然の中に見つける、小さな幸せでした。日曜の朝の教会で祈りとともに捧げられる、人々の歌声と美しいオルガンの音色でした。自分がちょうど1年ドイツにいても、それまでに経験したことのなかった時間、見たことのなかった景色、感じたことのなかった温もり。それらを僕はこの2日間、全身で体感したのでした。すごく新鮮だった。すごく、幸せだった。そんな素敵なきっかけをくれたのは、僕の一人の友人です。もう一度、会いに行かなくては—そう思って起こした行動の先に、自分のまだ出逢ったことのなかった世界がありました。でもそれはどこか、自分が探し続けていた世界であったような気もしました。こうした“時”はいつやって来るか、わかりません。留学の終わり、ほんの少し前にやって来ることだってあるのです。だからこそ、いろいろな縁に感謝したい。だからこそ、人とのつながりを大切にしたい。僕は最後の1か月で、何を学んだのか？どう成長したのか？それは一言でいえば、自分をさらけ出すこと。自分に素直になること。自分の弱さを認めること。この世界の人の生き方に、正解なんてものはない。自分はこれまで、ある意味その正解を、模範的なものを、追いつけていたのかもしれない。それを理想としてきたのかもしれない。でも人は皆、ひとりの人である。他人とは違う、自分がある。自分の感情を持った、自分がある。いや、いていいのだ。自分の考えや価値観が正しいかどうかなんて、それを計る基準なんてものはない。だから素直な自分を、ありのままの自分を、さらけ出せばいい。それで

こそ自分は、自分として生きていくことが出来る。でも自分をさらけ出そうとすると、自分には弱さがあることに気づく。そして人はそれを、見せまいとして隠そうとする。でも本当に強い人は、それをきちんと自分の中で弱さと認め、それをも隠さず表に出せる人だ。そうして、教えてもらえばいい、話し合えばいい、議論すればいい。そうやってこそ人は、自分の弱さを認め、補い、成長できるというものである。ドイツ語だって同じことだ。外国人であつたって、文法を間違えたって、語彙を知らなくたって、自分の持てる力で、弱さも含めありのままの自分を表現する。そうして全てを見せてはじめて、本当の対話ができるというものだ。僕がある意味このことに気づき、それを実践できたのは、この最後の1か月だったように思う。ドイツに到着したその日から、日々いろいろなことを経験し、考え、成長してきたと思っていたが、帰国後の今に亘って自身の考え方に大きく影響を与え、精神的な柱となるものを与えてくれたきっかけはこの留学最後の月、2019年9月の出来事たちだった。1年間のドイツ留学は僕に、自分は自分でいいのだと、自分は自分のその素直な感情を大切にしているのだと、自分はそれでこそ一人の個性ある“人”なのだ、そう思える自信をくれた。自分は1年、ドイツにいてヨーロッパにいて、こんな経験をした。こんな人たちに出会った。こんなものを見た。こんなことを聞いた。こんなことを考えた。それは間違いなく周りの誰も持ち合わせていない、自分だけのオリジナルな経験、ストーリーだ。人は皆それぞれ、そんな *Geschichte* を持っている。この正解のない世界で人は皆、何かを信じて生きるよりほかはない。では自分は何を信じているのか。その答えはいつでも、自分の中にある。だから僕はこう言う：ドイツへ、帰りたいと。なぜならそこに、自分の信ずるもの、自分の信ずる人々があるから。

#### < 勉学の状況 >

さてさて、最終号ということで随分もつともなことを書きましたが、これらは全て、自分がドイツで素直に感じ、考えたことです。本気で思っています。ただ、本当の意味で僕が言わんとしていることを理解してもらうのは、もしかすると難しいかもしれません。人の感情の機微を言葉で言い表すのは、つくづく難しいものだと感じました。でもその時その時の自分が抱いていた感情を、どうにか言葉でもって残しておきたい。そしてそれを数年後の、数十年後の、将来の自分が読んだときにどう思うか—実はこの一連の月間報告書、そういう思いで執筆してきたところもあります。だから言葉を選びます。だから時間がかかります。

さて、話の流れ的には前項の最後で締めくくっておくべきだったのかもしれませんが、先月号の末尾で例の *DSH* 受験記を綴るなんて約束をしてしまっていたので、当項では（いつも通りのノリで）そちらについて書きたいと思います。試験の日程としては、9月12日に筆記試験（*Hören, Schreiben, Lesen*）、その約2週間後の9月25日に口頭試験がありました。最終的な総合結果が出たのもこの日でしたので、本当に帰国の数日前まで試験の可否にハラハラドキドキだったわけです。なにせ帰国前、試験勉強ばかりするわけにもいきませんから。部屋の片づけはあるし、荷物まとめと発送はあるし、各種手続き

はあるし、もちろん大切な友達とも会いたいし。おまけにフィンランドとチェコに留学中の友達が遥々Leipzigまで遊びに来てくれ、かつその二人を連れ、僕にとっては二度目となるMünchner Oktoberfestへ行き、現地で最近オランダにてMasterを始めたという中国人の友人と再会し、夜通しバスに乗って日帰り帰って来て…みたいなことをやっていたから。そんな慌ただしい中でも試験のための勉強を効率的に進められたのは、同じくDSH合格を目指して勉強していた、ある日本人の友人の助けがあったからです。彼は僕と違い、毎日InterDaFと呼ばれるLeipzig大学附属の語学学校に通っていたので、そちらの授業で扱ったDSH対策用の問題テキストを僕に共有してくれたのでした。そして試験に向けて、お互い励まし合いながら一緒に勉強したのです。やはり持つべきものは友です。ありがとう。そして気になる試験の結果は…お互い最高の評価であるStufe 3で無事合格！嬉しかったですね。頑張ってきた甲斐がありました。これでドイツの大学で学ぶための語学能力証明はクリアです。試験の結果発表直後、すぐに合格を伝えたドイツ人の友達からも祝福の言葉ももらいました。でもこれはまだまだ始まりに過ぎない、自分の道はこれからです。さて、当報告書に多少でも有益なDSHに関する情報を載せておくため書いておくと、Leipzig大学の場合、先月も述べたStufe 1,2,3の評価は、筆記試験の各項目の平均点と口頭試験の点数の両方に関して、得点率で82%以上：Stufe 3、67%以上：Stufe 2、57%以上：Stufe 1、57%未満：不合格となります。また先ほど語学学校InterDaFの話をしました。通常、外国人学生がDSHを受験しようとする場合、このような大学附属の語学学校で開講されているC1コースないしDSH対策コースにまず入るのが普通です。InterDaFでは、C1コースの最終テストとしてDSHが位置付けられています。それ以外で、要は僕のように外部受験者として受けることも出来ますが、その場合には一定の資格（具体的に言うと、ドイツの大学からすでに入学に対するVorzulassungをもらっていること）が必要になる場合が多いです。僕はそのような手続きを行っていませんでしたが、幸い身分として既にLeipzig大学の交換留学生という扱いだったので、そのまま受験させてもらえることになりました。また、内部および外部受験者が最終的に手にするZeugnisについてですが、前者はあくまで対応するC1コースの修了証のようなものを受け取るのに対し、僕はDSH-Zeugnisそのものを受け取りました。両者の違いについて、僕が手にしたZeugnisはその名の通りそのままDSHの結果証明書ですから、特に有効期限などはなく、大学側さえ認めればドイツ国内のあらゆる大学にその証明書をもって入学申請を行うことが出来ますが、前者はあくまでもコースの修了証なので、それを規定の期限以内（たしか1年）にDSH-Zeugnisへと書き換える（＝実際にいずれかのドイツの大学からZulassungをもらう）必要があるらしいとのこと。非常に細かい話ではありますが、それこそ今後、将来にわたっていつどんな人がこの報告書を手に取って読んでいるかわからないですからね。僕だったら、こういうインターネットのページを見てもなかなか載っていないような情報こそ、書いておいてくれるとありがたいなと思うものです。こうした点もやはり、僕がこれまで一連の報告書を執筆してきた中で、常に念頭に置いていたことでしょう（ほんとかな）。未来につながる、記となるよう願って。

<エピソード>

さて、僕の2018年9月の報告書の<はじめに>を読んでからここまでたどり着いた人は、おそらく（よほどの物好きでもない限り）いないでしょう(笑)。およそ1年と2週間、本当にいろいろな経験がありました。たくさんのお会いがありました。これら全12号にわたる報告書を僕も今一度、通して眺めてみたのですが、その中で一つ気がついたことがあります。それは何か？—それは、自分がいつもいかに「人」とのことについて好んで書いていたかということです。限られた紙面の月間報告書（本当は字数制限はありません）、その月に自分の周りで起こったこと1秒1秒を記録することはもちろん出来ません。ではそんな制約の中、自分はどんな思い出を思い起こし紙に綴ろうとするのか、どんな瞬間が自分の頭の中で美しき時として鮮明に蘇ってくるのか—そういうことだと思います。意識的だったのか、無意識的だったのかはわかりません。でも確実に言えるのは、僕はこの1年の留学において何よりもそうした「人とのつながり」に感謝しているということです。僕がこの1年間の中で一番好きなものは、これです。その証拠に：僕がLeipzigを去る前日のことでした。その日、自分が何をしでかしたかと言えば…そう自分のためのAbschiedsfeierです。大勢の友達を呼んで、お別れのBBQパーティーを開いたのです（またか）。午前中、外は土砂降りの雨。開催され危ぶまれる中、ああ、自分は最後の最後で運がないのかと嘆きました。しかし天は、その雲の切れ間から濡れた寮の裏手の芝にそっと、午後の斜陽を投げかけてくれたのです。そんな穏やかな午後の光の中、そこに一人、また一人、と集まったのは…30人を超える、僕との別れ際に赴いてくれた友人たちでした。留学のため僕より一足早く日本へ旅立ってしまった人、休暇中のためLeipzigからは遠い故郷に帰省していた人、仕事の都合があってもどうしても駆けつけられなかった人…最後、その姿をもう一度見る事が叶わなかった人も大勢いますが、そこに、それだけの「人」が、僕のために来てくれた事実に、もう感謝の思いで胸が一杯でした。「僕の留学の中で、最も美しい時間」、それは一体いつやって来るものなのでしょうか。それはやはり、留学の最後に訪れるのでしょうか。ともすればそれは、同時に最もつらく悲しい時間でもあるのかもしれませんが。」…僕にとっての最後の時間は、決して悲しいものではありませんでした。多くの人に囲まれた時間でした。多くの人と過ごした時間でした。一緒に笑った時間でした。幸せな時間でした。「さよなら」を言った時間でした。また会うことを、誓った時間でした。（以下、帰国直後のFacebook投稿より）

Danke an alle, die bei meiner Abschiedsfeier dabei waren.

Danke an alle, die da leider nicht dabei sein konnten.

Danke an alle, die ich in Deutschland kennengelernt habe, und die mein Auslandsjahr ein wundervolles Jahr gemacht haben.

Ich will nach Deutschland zurück, weil es mir dort sehr gut gefallen hat.

Ich soll nach Deutschland zurück, weil da meine lieben Leute sind.

Wir sehen uns. また会う日まで。Vielen lieben Dank. 本当にありがとう。